

# 学位論文

題 目 消滅の危機にある上海弁に関する言語政策の取り組み  
—民間レベルでの言語政策の可能性—

指導教員 西山 教行 教授

令和 5 年 1 月 3 日

京都大学大学院 人間・環境学研究科  
修士課程 共生人間学 専攻

氏 名 HUANG ZUO

# 論文内容の要旨

共生人間学 専攻 氏名 HUANG ZUO

本研究は「消滅の危機にある上海弁」の事例を取り上げ、文献研究と半構造化インタビュー調査を通じ、上海弁の衰退の原因を探求する。

上海弁の衰退の原因を解明するために、まずは上海における言語政策の歴史と現実を分析する。

次に、民間レベルでの言語政策の可能性に注目し、ユネスコの「岳麓宣言」の採択によりもたらされた言語政策転換の可能性、また NPO 組織による「上海弁ピンイン」の策定および『上海弁大辞典』の刊行を機に上海弁の標準化が行われつつあることを示した。

さらに複数の新老上海市民に半構築インタビュー調査を行い、個人と家庭での言語使用を考察した。

分析の結果として以下の三点を解明した。

第一に、普通話普及政策そのものが問題ではなく、その過剰な普及政策が、上海弁の衰退を加速する要因の一つとなる。

第二に、移民都市における新老上海市民の対立は、上海弁の生態を大きく左右する。

第三に、上海弁の衰退に直接に関わる最も重要な原因は個人の多言語意識の欠如であり、これによりもたらされた家庭における言語計画が十分に実行されない点である。

最後に、今後の上海の家庭における言語計画の可能性について、多言語意識を育むことの重要性、「上海人とはなにか」ということを考えることの重要性を強調した。

## 謝辞

本論は令和3年4月から京都大学大学院修士課程における研究成果をまとめた論文です。本論の完成に至るまで、大変多くの方にご助言とご協力を賜りました。

西山先生に、指導教官として研究のご指導と貴重なご助言を頂きました。西山先生は、読書会や研究会を通じて、言語政策と外国語教育に関するご示唆とご知見を私に与えてくださいました。また、研究生として入学して以来、研究生生活や進路などについても励まし言葉を頂きました。ここに感謝の意を申し上げます。

柳瀬陽介先生に、言語教育設計学の授業で言語教育を哲学的視点から考えるご知見を頂きました。

張尋さん、趙芸琳さん、張一涵さんに、論文の構成と論文の進め方に関して、温かいご助言ご鞭撻を賜りました。

また、他の力になっていただいた先生、先輩、同輩、後輩、友達、家族、全てに感謝の意を表します。

# 目次

論文内容の要旨 .....	I
謝辞 .....	II
序章 .....	3
第一章 研究背景 .....	4
1.1 研究背景 .....	4
1.1.1 強勢方言である上海弁の危機に瀕する現状 .....	4
1.1.2 方言の保存に関する2つの立場 .....	6
1.2 先行研究とその問題点 .....	7
1.3 研究目的 .....	10
1.4 研究方法 .....	10
1.5 用語の定義 .....	11
1.5.1 民間レベルの言語政策の可能性、言語政策と言語計画の主体 .....	11
1.5.2 家庭における言語政策 .....	13
1.5.3 中国の言語と方言 .....	15
第二章 上海における言語政策 .....	16
2.1 現代中国の言語政策および方言政策の欠落 .....	16
2.2 上海における言語政策 .....	18
2.3 まとめ .....	22

第三章	NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組み .....	24
3.1	NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組み .....	24
3.2	上海弁の「ピンイン」、教材と辞書 .....	28
3.3	まとめ .....	39
第四章	家庭における言語計画 .....	40
4.1	移民都市・多言語都市の上海 .....	40
4.2	新老上海市民の言語生活の半構造化インタビュー調査 .....	46
4.3	家庭における言語計画 .....	54
4.3.1	家庭の言語計画から見る上海弁の衰退 .....	54
4.3.2	今後の上海の家庭における言語計画の可能性 .....	56
4.4	まとめ .....	57
第五章	結論と今後の課題 .....	59
5.1	結論 .....	59
5.2	本研究の限界と今後の課題 .....	60
	参考文献 .....	62
付録 1	新老上海市民の言語生活の半構造化インタビュー調査の内容 .....	72

## 序章

本研究では、上海弁の衰退の原因を中心に検討しつつ、民間レベルの言語政策の可能性についても考える。それらの民間の取り組みによって、上海弁の衰退を軽減する可能性を検討する。

本研究は、以下の全五章から構成されている。

第一章では、絶滅の危機にある上海弁の現状、方言の保存に関する2つの立場、先行研究とその問題点、研究の目的、研究方法について述べる。

第二章では、上海弁の衰退と国家レベルの言語政策の関係、学校での方言禁止とマスコミの方言禁令にみられる上海における言語政策を論じる。

第三章では、NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組みを紹介する。ユネスコの「岳麓宣言」の採択によりもたらされた言語政策転換の可能性、言語の規範化に必要な2つの要素、正音法および正書法と関わる上海弁の「ピンイン」方案、教材と辞書について論じる。それらの取り組みにより上海弁の衰退を軽減する可能性を検討する。

第四章では、移民都市・多言語都市の上海の実態を踏まえ、新老上海市民の言語生活に関わる半構造化インタビュー調査を通じ、新老上海市民の言語生活を、家庭・個人の言語使用と言語選択、アイデンティティ、言語態度と言語意識という三つの側面から分析し、上海弁衰退の原因について検討する。さらに家庭の言語計画から見る上海弁の衰退について論じ、上海の家庭における将来の言語計画の可能性を考える。

第五章では、論文の結論をまとめ、解明点を提示する。また本研究の限界を整理し、今後の課題について述べる。

# 第一章 研究背景

## 1.1 研究背景

本章では、絶滅の危機にある上海弁の現状、方言の保存に関する2つの立場、研究の目的、先行研究とその問題点、研究方法について述べる。

### 1.1.1 強勢方言である上海弁の危機に瀕する現状

この節では、強勢方言でありながら危機に瀕する上海弁の現状について述べる。

「強勢方言」とは「弱勢方言」の対義語であり、さまざまな方言が話されている地域において、社会経済的、文化的に強い影響力を持つコミュニティのメンバーが話す威信の高い方言を指すことが多い。

上海弁は、中国では「上海話」と呼ばれている。日本では「上海語」と訳しているが、「語」は中国では「呉語、粵語、閩語」のような「大方言」を指すので、本稿では、「大阪弁」「関西弁」の「弁」を使い、「上海弁」という呼び方を選ぶ。

呉語の代表的な方言に関しては、明朝時代の嘉興弁、清朝・近代の蘇州弁、近代・現代の上海弁と3回にわたって強勢方言の交代が行われた。

明・清時代には、蘇州の経済と文化は徐々に上向きになって、全国に影響を与えていった。また呉語の白話文である「蘇白」で書かれた小説が大量にあらわれた。その後、太平天国の乱(1851～1864)が起り、蘇州は破壊された。それに対して、南京条約(1842)が結ばれた、上海は条約港として開かれ、外国租界が設置されたおかげで、太平天国の乱の被害をそれほど受けていなかった。1912年に成立した中華民国になってから経済発展とともに、資本主義市民文化が発達し、上海は「東方のパリ」「東洋の真珠」という美名が付けられ、上

海弁は蘇州弁に取って代わって事実上の呉語を代表する強勢方言となり、上海は世界最大のコスモポリスのひとつに成長した。しかしながら上海弁の衰退も現実のものとなって迫ってきた。そこでいくつかの調査をもとに、その実態を紹介する<sup>1</sup>。

上海弁で「自分が話したいことをどのくらい話せるか」を尋ねたところ、2000年の調査では、「十分に話せる」と回答した生徒は総数の97.63%であったが、2005年の調査では、総数の54.3%にとどまった。そして「話せるが、十分な正確さを欠いた」と思った生徒が40.3%に上った。2015年の調査では、「十分に話せる」と答えた生徒はさらに減り、28.1%になった。

母語の視点から見ると、2000年の調査では、年齢が15～29歳のグループで幼少期より自然に習得してきた言語が上海弁である割合は92.73%で、それに対して普通話の割合は14.48%<sup>2</sup>である。2007年の調査では、母語が上海弁の割合は44.4%にさがり、それと反対に幼少期より普通話と上海弁をともに習得した割合は30.5%となり、普通話だけの割合は17.3%で、併せて普通話を習得した割合は47.8%である。2015年調査では、普通話の割合は64.3%に至った。

また、上海弁に関する認識の変化は、以下のように評価されている。

方言は滅びることはなく、普通話と共存し、変化しつつある(遊 2006)。若者の上海弁のコミュニケーション能力は急激に低下しつつある(銭 2011)。かつては勢いのあった上海弁が

---

<sup>1</sup> 2000年調査: 中国教育部(日本の文科省にあたる)による中国言語文字の使用状況に関する調査(2006年に出版した)。2005年調査: 蔣(2006)などが行った上海における学生の言語使用に関する調査(8661人分のサンプリング調査)。2007年調査: 孫、蔣、王、喬(2007)等は2005年調査のデータベースを用いて学生たちの言語習得や言語能力に関する内容をアンケート調査により検討した。2015年調査: 俞(2016)が行った上海における青少年方言使用に関する調査(5370人分のサンプリング調査)

<sup>2</sup> アンケート回答者は回答を複数選択できるため、全体(92.73%+14.48%)は100%を超える可能性がある。



将来的に消滅する可能性がある(張 2014)。このように、強勢方言である上海弁は絶滅の危機に瀕している。

### 1.1.2 方言の保存に関する2つの立場

この節では、方言の保存に関する2つの立場について述べる

Ladefoged(1992)は、言語の消滅は自然のプロセスであり、できるだけ自然のままに、人間の介入を控える姿勢が重要であり、絶滅の危機にある言語を後世に伝えるために記録や保存調査を進めることで十分であると主張している。

このような観点によると、「人間は死ぬものである」と同様、「言語もいつか必ず死ぬ」。その大きな原因のひとつは、その言語と文字を使用していたコミュニティが消滅することである。また言語や文字が消えていったもう一つの重要な原因は、より強力な文化侵略によるもので、経済的、政治的、軍事的、人口学的に弱い立場にあるコミュニティであるならば、言語や文字はやむをえず衰えることになる。

それとは逆に、Badenoch(2010)は、人間の言語は日常的なコミュニケーションの道具という枠をはるかに超え、話し手の知識や信念体系の表現であり、文化を象徴する顔であり、そのため言語を失うことは、人類が不確実な未来に立ち向かう力を失うことになる」と主張する。そして Badenoch は、言語の多様性を守るために、絶滅の危機に瀕した言語を復興し、言語的マイノリティの言語教育と識字を促進することに取り組んでいる。

言語の多様性を守る Badenoch の観点には、以下の二つのポイントがある。

第一に、人類は自然に影響を与えている一方、自然からの影響も受けている。世界は、人と自然との相互作用によってできており、自然と共生する世界を実現するために、決して

何もしないわけではない。生物の多様性を守るべきと考えると同時に、資源としての言語の多様性は守らなければならない。

第二に、言語はコミュニケーションの道具であり、思考の道具でもあるが、それだけではない。言語の置き換えは過去にも現在にも行われており、人々はしばしば言語の道具的な価値だけを見つめて言語を選択し、言語の「文化的伝承性」というもう一つの側面を軽視している。文化は言語によって伝達され、ひとつの世代から次の世代へと伝えられ、学習される。言語は文化の一部であり、文化そのものを表し、言語と文化は一体である。言語の多様性を守ることは、文化の多様性を守ることにつながる。

このような観点から中国の言語状況をみると、中国の 7 つの方言の形成は中国の文化や歴史と緊密なつながりがあり、文化は歴史を構築している。たび重なる人口移動の中で言語は混じり合っ、さまざまな方言が形成されたことから、人口移動の歴史は、方言の形成の歴史そのものである(周、遊 2006)。

上記の方言の保存に関する立場を踏まえ、本稿では、言語の多様性を守る Badenoch の観点を取り入れる。方言の消滅は地域文化の喪失につながることに加えて、中国の文化的多様性に及ぼす影響も計りしれない。方言はその地域の住民にとって、母語でもあり、地域との絆でもある。曹(2001)によれば、方言の消滅による負の影響は政治的、心理的、社会的、文化的、言語的分野にわたるため、積極的な介入が不可欠である。

## 1.2 先行研究とその問題点

この節は、上海弁の衰退と保護に関する研究、方言に関する言語政策の先行研究を検討する。

### (1) 上海弁の衰退と保護に関する先行研究

雷(2008)は、上海における新しい移住者の言語選択、言語習得、言語能力、言語態度を記述し、外来人口の視点から上海弁と普通話の言語接触および言語変化について考察し、普通話の勢力が一層強くなった現状を解明した。

褚(2021)は、言語学の観点から上海弁の音変化や語彙変化について論じ、発音の違い、伝統的な語彙の衰退、常用単語が見たことのない単語に変わることなどを例として挙げ、普通話の影響による上海弁の変化を示した。

朱、焦(2021)は、普通話普及政策の推進を背景に、家庭言語教育の視点から、上海における6つの家庭を対象に、世代間の言語継承に関する実態を考察した。その結果、これらの家庭では、普通話の使用を主流とする一方で、社会文化的価値観の形成やアイデンティティ構築などにおける上海弁の役割と重要性を認識しており、子どもに対して上海弁を勉強し使用するよう奨励している。この研究から、家庭の言語教育は方言の継承に役立つことが判明した。

費(2021)は、上海弁の童謡を研究対象に選び、家庭内における童謡の伝承が中断した状況を分析し、間接的に上海弁の衰退を示した。

## (2) 方言に関する言語政策研究

次に、「方言禁令」と「岳麓宣言」の二つの課題を検討する。

小田(2018)は、かつてブームとなった上海弁のテレビ番組が当局によって規制され不安定な状態が続いてきたが、ポスト普通話普及時代に立ち、その言語政策の動向を引き続き注目すべきであると論じ、「方言禁令」に対して中立的な態度を示している。

一方、兪(2018)は、方言テレビ番組の台頭によって引き起こされた方言の濫用を深刻な社会問題と捉え、方言番組の低俗化や娯楽化傾向が強いことや、それによるコミュニケーションの障害や、共通語の規範性や純粋性が損なわれることなどを例として挙げ、方言番組が

普通話普及という国策に相反すると分析する。この研究は、マスコミが言語政策において重要な役割を果たしていること、またテレビ局による方言番組の放送禁止が、短期的には、粗雑な方言番組の数を抑制する効果がある一方で、長期的には方言番組ブームは変わっていないと分析する。「方言禁令」は過剰な措置だろうか。また方言話者である高齢者の言語生活にはどんな影響がもたらされるのかなど、さらなる議論を行う必要がある。

次に、「岳麓宣言」を説明する。「岳麓宣言」とは、2019年2月21日に正式に発表された初の「言語の多様性の保護」をテーマとするユネスコの文書であり、国際社会、国、地域、政府、NGO に対し、世界における言語多様性の保護と促進についての合意を得るよう呼びかける取り組みである。ユネスコは、それまで「方言」という用語の使用を避けてきたが、「岳麓宣言」では一転して「方言」という用語を用いている。

小田(2020)は、この宣言が中国の言語政策を支持していること、さらにこの宣言を通じて、中国が国際的な影響力を強め、言語政策の分野で主導的な役割を希求していると分析する。

### (3) 先行研究の問題点

先行研究のほとんどは、間接的であろうとなかろうと、普通話普及政策に触れるものの、上海弁の衰退と「移民都市」であり多言語都市である上海の社会事情との関係について明確な答えを示していない。

ここでの「移民都市」とは中国の地方からやってきた人が上海の多数を占めている状況を指すもので、日本語の「移民」すなわち海外に移住する人々ではない。「新老上海市民」について、「新上海市民」とは、改革開放後、地方から上海にやってきて上海の戸籍を取った人を指し、「老上海市民」とは改革開放の以前に、上海に居住または移住した人とその子世代を指す。

新老上海市民の暮らしを取り巻く経済、文化、生活習慣、社会環境の違いによって生じた対立や矛盾、移民都市の上海やコスモポリスなどに深く関わる家庭や個人の言語使用、言語選択について方向性を出すにはさらなる検討を要する。また、どのように上海弁を守るかについても、行政主導の言語政策にどどまるのではなく、NGO・NPO 組織の言語政策への貢献や家庭における言語計画の可能性を精査する必要がある。

### 1.3 研究目的

本研究は、上海における言語政策を分析し、その歴史と現実、さらに個人と家庭での言語使用というミクロの視点からも考察し、上海弁の衰退の原因を検討する。次に、従来の研究が注目していない民間レベルでの言語政策の可能性に注目し、NPO 団体の作り出した「上海弁ピンイン」を紹介し、言語学的手法を用いてその実現の可能性を論じる。最後に、複数の新老上海市民に半構築インタビュー調査を行い、豊かで多様性に富む社会に向けた方言と共通語の共生ができる家庭における言語計画の可能性を考える。

### 1.4 研究方法

本研究は、「文献研究」と「インタビュー調査」の方法を用いる。

上海の言語政策の考察にあたり、政府の公的文書と法令文書、とりわけ「岳麓宣言」にスポットを当てる。

インタビュー調査では、「新上海市民」4名と「老上海市民」2名に対する半構造化インタビュー<sup>3</sup>を行い、新老上海市民の対立、移民都市の上海やコスモポリスなどに深く関わる家庭や個人の言語使用、言語選択に関する言語生活を分析する。

## 1.5 用語の定義

この節では、言語政策と言語計画の主体、および民間レベルの言語政策の可能性、家庭における言語政策について、また中国の言語と方言について説明する。

### 1.5.1 民間レベルの言語政策の可能性、言語政策と言語計画の主体

#### (1) 言語政策

戴、賀(2010)によれば、言語政策とは、政府が憲法や法律に基づき、どの言語を使用するかを決定し、また国家の優先事項を満たすために共通語や標準語を普及し、あるいは個人及び言語的マイノリティの言語を使用・維持する権利を認めるための政策である。

Phillipson (2003)によれば、一国の言語政策は3つの部分から成り立っている。まずは、国や地域において1つまたそれ以上の言語を公用語または共通語として認めること、マジョリティーまたはマイノリティーの言語を話す人々が教育や公共サービスなどの活動において母語を使用する権利を有すること、ビジネスやメディア、出版において特定の言語を使用することを法律で定めることである。第二に、ある言語における権威のある文法書、辞書などの作成や出版である。第三に、第一言語、第二言語、外国語を問わず、教育分野において特

---

<sup>3</sup> 半構造化インタビューとは、大まかな流れに沿って行われる質的調査法である。この方法は、調査協力者の回答に応じて柔軟に調整を行うことができる。質問の仕方や順序、回答者の答え方、インタビューの記録方法、インタビューの時間や場所などについて、特に決まりはなく、状況に応じてインタビューアーの自由裁量に任される。

定言語の学習に関する方針や政策である。

陳(2015)によると、言語政策は、言語計画の実施によって実現される。また『中国大百科全書・言語文字卷』(『中国大百科全書』出版社編集部編、1988)によれば、言語計画は、国家または社会の各主体が言語を管理するために行うさまざまな行動の総称である。

本稿では、戴、賀(2010)の言語政策の定義を取り入れ、また言語政策と言語計画の関係について、陳(2015)の定義を採用する。

## (2) 言語計画の主体

Kaplan and Baldauf (1997)は、言語計画は「マクロ、メゾ、ミクロ」の3つのレベルで行われると主張している。マクロレベルの言語計画とは、通常、政府が実施する国家レベルの言語政策を指す。メゾレベルの言語計画は、言語の維持、保護と復興のための政策立案、およびその政策の実施に重点を置く。ミクロレベルの言語計画とは、家庭、学校、経済団体、行政機関、地域社会など幅広い分野で行われる言語計画のことである。また Spolsky (2004)は、言語計画の適用範囲を社会集団の最小単位である家庭、学校、地方政府、宗教組織、国家、超国家的組織・集団と定義している。

嶋津(2011)によると、言語計画の立案・実施の主体には、国家やそれに準じる機構だけでなく、もっと広い視野で捉えた家庭、学校、教育団体、経済団体・企業、NGO や NPO なども含まれる。

本稿は、Spolsky (2004)と嶋津(2011)の観点に立ち、家庭、学校、NGO や NPO 団体などを言語計画の立案・実施の主体と考える。

## (3) 民間レベルの言語政策の可能性

中国において、「民間(非公式)」とは、「官方(公式、国家、政府)」の対義語である。本稿では民間レベルの言語政策の可能性を、家庭から学校、教育団体、経済団体、民間組織・

団体などまでを含む、公の機関に属さない団体などが行う言語政策に関する取り組みと定義する。

### 1.5.2 家庭における言語政策

家庭言語政策 (Family Language Policy) とは、Schiffman (1996) によって初めて紹介され、家庭における言語選択・使用、言語教育に対する明示的な計画策定のことである。その計画は明示的で観察可能な場合もあれば、言語意識や信念などに影響されて暗示的で観察困難な場合もある。

家庭言語政策は、日本語では受け入れられにくい可能性があるが、それは日本語の「政策」と英語の“policy”という単語に対する認識・理解の違いに起因するところが多い。英語の“policy”には政策のほか、やり方や方策などの意味も含まれているが、日本語の政策には、次の二つの意味があると思われる。

「① 政府・政党などの、基本的な政治の方針。政治方策の大綱。政綱。

② 個人や団体が、目標を達成するために手段としてとる方法。」(スーパー大辞林)

政策は多くの場合、第一の意味に捉えられがちである。このゆえ、本稿で語った家庭における言語政策の「政策」は、第二の意味を取り上げ、方策を指す。またユネスコの「岳麓宣言」の策定者の一人である李 (2022) は家庭言語政策ではなく、家庭言語計画という用語を用いてその著作を『家庭言語計画研究』と命名した。そこで本稿では、家庭言語計画という用語を用いる。

個人・家庭・コミュニティの言語行為と国家レベルの言語政策の関係は、言語政策研究の中心的な課題の一つである(「中国社会科学報」2015年12月22日)。これまで長い間、ミクロレベルの言語計画に関する研究と平行して、マクロレベルの言語政策研究が重視されて



きたが、今後マイクロレベルの研究(言語の社会言語学)とマクロレベルの研究(社会の社会言語学)の統合が必要と思われる(高 2009)。そのためマイクロレベルの言語計画に関する研究が盛んになりつつある(李 2022)。これによって、家庭における言語計画の重要性も再認識させられる(李 2022)。Caldas(2012)によると、家庭はすべての言語政策が始まる場所であり、すべての有意義な言語政策が最終的に実施される場所である。

Spolsky(2004)は、言語計画は、言語実践(language practice)、言語信条あるいは言語意識(language beliefs)、言語管理(language management)の3点に相互依存しながらも独立した要素から構成されると論じている。家庭における言語計画も、以下の3つの要素から構成されていると考えられる。

①家庭の言語実践:すなわち家族のメンバーが、異なる環境に置かれて異なる目的のためにコミュニケーションをとる時、どんな言語を選び、どんな言語を使用することを指す。

②家庭の言語信条あるいは言語意識:すなわち、家族のメンバーが使用する・あるいはメンバーから使用される言語に関する態度や認識である。

③家庭の言語管理:すなわち家族の言語実践や言語意識に介入し、影響を与え、修正する具体的な行為のことである。

Curdt-Christiansen(2020)は、感情(emotion)、アイデンティティ(identity)、親の養育信念(parental impact belief)、子どもの能動性(child agency)などの家庭言語計画に影響を与える内的要因と、言語地位(language status)、政治的忠誠心(political allegiance)、教育目標(educational goals)、経済的利益(economic benefits)などの外的要因について詳述している。

本稿では、Curdt-Christiansen(2020)の家庭言語計画に影響を与える内的要因と外的要因を考慮したうえで上海人の家庭における言語計画から上海弁の衰退を分析する。

### 1.5.3 中国の言語と方言

この節では、中国の言語と方言の問題について議論を行う。

魯國堯(1992)によると、古代漢語の「方言」は、言語学の「方言」の意味に加え、「言語的マイノリティ」、さらに「他国の言語」の意味も含んでいる。それに対し、現代漢語の「方言」は、「北方方言(官話方言)」、「呉語」、「粵語(広東語)」、「贛語」、「湘語」、「閩語」、「客家語」を指すのが普通である。

現代漢語の「方言」は、現代の社会言語学で語られる「地域方言」と類似しているように見えるが、言語と方言を区別する基準の一つである相互理解可能性(mutual intelligibility)の視点から見れば、「中国では北京などの北方の言葉と広東や福建などの南方の言葉とではまったく通じないが、同じ中国語の方言という扱いである」(斉藤 2010、p.213)。実際には、今からおよそ 100 年くらい前に Karlgren(1920)は官話、呉語、粵語などを含む現代諸方言は同じ中古音<sup>4</sup>から生まれたものであると考えていたのである。

Mair(中国語の名前:梅維恒)(1991)は、中国で語られた「方言」はヨーロッパの方言と全く別の概念で、中国の方言「官話、呉語、粵語、贛語」はヨーロッパの「英語、オランダ語、ドイツ語」に対応すると指摘し、“dialect”ではなく“topolect”と呼ぶことを提唱する。“topolect”は「場所」を意味するギリシャ語の語根“topo”と“-lect”を組み合わせで作られた造語である。過去に DeFrancis (1984)は、「地域の、地方の」の意味を表す“regional”と“-lect”の組み合わせでできた“regionalect”という用語により、“dialect”と区別する概念を考案した。

その後、2つの話し言葉が異なる「言語」なのか、それとも1つの「言語」の異なる「方言」なのかを判断する際の曖昧さを回避し、また標準語の正しさを訴え、方言の「正しなさ」や

---

<sup>4</sup> 「カールグレンにとって、中古音とは切韻の体系ではなく、現代諸方言の祖語としての唐代長安音である(唐代長安音が真に祖語であるかどうかは今は措く)。(中村 2007、p.2)

威信の低さといった臆見を避けるため、Hudson(1996)は“variety”を提案した。社会言語学において“variety”は、ある言語やその言語の地域方言から社会方言まで、多様な内容を含むもので、“dialect”よりも広い概念である。中国の「方言」は、“Varieties of Chinese”と訳すこともできる。

## 第二章 上海における言語政策

第二章では、上海弁の衰退と国家レベルの言語政策の関係、学校での方言禁止とマスコミの方言禁令にみられる上海における言語政策を論じる。

### 2.1 現代中国の言語政策および方言政策の欠落

この節では、「現代中国の言語政策と方言政策の欠落」を論じる。現代中国における共通語政策は以下の4点に総括できる。

一つ目は、中国文字改革委員会を設立したことである。1954年に言語政策の執行機関として中国文字改革委員会が設立された。これは1985年に国家言語文字工作委員会に改称され、中央、県、市各レベルの行政機関に、作業支局が置かれた。

二つ目は、漢字の「簡体字化」である。かつて由緒正しい表記として使われてきた繁体字と異なり、1956年に国務院は「第一次漢字簡化方案」を公表し、漢字の偏と旁を簡略化し、簡体字を通じ識字率の向上を図ろうとした。これにより、中国は新しい正書法の改革に踏み切った。

三つ目は、「漢語ピンイン方案」の策定と実施である。ラテン文字を使用して現代漢語音を表記する「漢語ピンイン方案」は、1958年2月11日に漢語の正音法として全国人民代表大会(日本の国会に相当する)で承認された。

四つ目は、1956年2月に国務院は「普通話普及政策」を実施したことである。さらに政府は普通話を明確に定義し、北京語音を標準音とし、北方方言を基礎語彙とし、模範的な現代口語文の著作を文法規範とするものを「普通話」と呼んでいる。

しかし共通語政策のなかに方言政策に関する記述は見つからなかった。

そこで次に、中国の言語政策の70年史をまとめた周(2019)の論文を検討するが、この研究によれば、方言と関わっている言語政策は3点ある。

一つ目は、「中華人民共和国国家通用語言文字法」の第16条に認められる。これによれば、国家機関の職員が公務の遂行に必要なとき、国務院ラジオ・テレビ局または省レベルのラジオ・テレビ局が承認したとき、伝統劇・映画・テレビなどの芸術分野で使用する必要があるとき、さらには出版、教育、研究等に使用するために必要なときには、方言を使用することができる。

二つ目として、近代化と都市化の急速な進展に伴い、中国語の方言はかつてない速さで変化し、方言が絶滅の危機に瀕し、地域文化の衰退を招いていることである。

三つ目として、2015年5月に中国の教育部(文部科学省に相当)と国家言語文字工作委員会は「中国言語資源保護プロジェクト」を立ち上げ、全国規模の言語・方言資源調査、保存、展示、開発、利用を中心とした様々な仕事を進めることを決定したことである。上記以外のところで、方言はまったく言及されていない。

言語政策研究には、「見える政策」の研究のみならず、「見えない政策」を研究する必要もある。政府はある政策に対して何を語り、何を語っていないのか、そしてある政策に対して何

を行い、何を行わないのか、またある政策を語ったのが、実際に行われたかを検討する必要がある。

この点では、普通話普及政策に対して趙(2020)を初めとする一部の学者から、普通話にだけ注目する政策への懸念が示されている。ある地域では普通話普及の行き過ぎにより方言が取って代われつつあることから、「方言」と「普通話」の双方を考慮に入れた地方主導の言語政策を採る必要があると考えられる(趙 2020)。

また曹(2001)は、危機にある方言の原因を3点から整理する。まずは、言語政策の中で、方言に関する法律の規定が明確でなく、方言の地位が低いこと。次に、学校、マスコミ、公の場における方言使用が禁じられており、さらに家庭での方言使用も減りつつあること。三つ目は、粵語を除き、ある方言に書き言葉はなく、あるいは書き言葉による文献は存在しないことである。

中国ではこれまで、方言について明確な方針を示していなかったことから、曹(2001)を代表とする専門家は言語政策における方言の位置づけと役割の明確化を求めている。

## 2.2 上海における言語政策

本節では、普通話普及政策の両翼である学校での方言禁止とマスコミの方言禁令とを中心に論じる。

### (1) 学校での方言禁止

学校での方言禁止は、普通話普及政策と連動している。1949年の新中国建国から1978年の改革開放までの上海における普通話普及政策を評価するには、史料が乏しく評価が困難である。そこで1980年代以降の学校での方言禁止について検討する。

賓(2011)は、1950年代半ばから80年代までの上海での普通話普及は、中央政府の期待に応えたものではなく、形式的な対応をとることが少なくなく、方言は強勢にとどまると指摘する。また80年代に国内のさまざまな政治運動と連動して普通話普及が何度も再開されたものの、成果はあまりあがらなかったと評価している。

1984年に杭葦は、『文字改革』専門誌に論文を発表し、学校生活において誰もがいつでも、どこでも、どんな状況でも普通話を使うことが求められると初めて主張した。

1990年代に入ると、上海市の言語文字工作委員会(国家言語文字工作委員会の下部組織)は法令「上海語言文字委員会および上海市教育委員会発行1990年第1号法令」を出した。この法令にある普通話に関する要求は、以下のように確認できる。

第一点としては、全ての学校で普通話を使用することが求められる。小中学校と幼稚園では授業や集団活動で普通話を使い、またさらに次第にあらゆる場面で普通話を使用すること、そして中学校・高校では引き続き、普通話の使用拡大を図ることが求められている。

第二点としては、国語教師や、1980年以降に卒業した各教科の教師と幼稚園の教師は、少なくとも普通話2級のレベルに達すべきである。その他の教科の教師も普通話で授業を行うことが要求されている。また小中学生は普通話2級のレベルに達すべきであり、そのうちの30～40%は普通話1級のレベルに達すべきである。

第三点としては、規範漢字と普通話の使用は、授業の評価と教師の業務スキルを測る基準として認められており、また優秀な学生を選抜する選考基準として用いられる。そしてそれに見合った表彰や奨励制度を確立することが求められている。

この「法令」を見ると、小中学校と幼稚園において、授業や学校の集団活動などあらゆる場面で普通話を使うことが明確化されていることがわかる。これと同時に1992年から上海のすべての小中学校では、授業の休み時間に上海弁を話すことが禁止された、さらに一部の

学校では、授業の休み時間に上海弁を話すことの有無と、生徒の成績と教師の評価、およびクラスの表彰旗が関係付けられるようになり、その結果、多くの子どもたちは幼稚園から普通話を使うようになった。これが 1990 年代以降の上海弁衰退の大きな要因の一つとなっておりと銭(2013b)は指摘している。この一方で銭(2013b)は、上海弁を学ぶ上で最も重要なことは、仲間同士でお互いに上海弁を使用する環境を作り、語彙力や言語技能を高めると、生徒が授業外でも上海弁を話す機会を増やすことであると指摘する。

この他にも、王、趙、銭(2013)は、1992 年以後、授業での上海弁使用は減点処分を招くため、「学校での方言禁止」の影響を受けた若い世代において、上海弁の衰退が余儀なくされたと分析している。しかも上海だけでなく、広州など中国の他の都市でもこのような「方言使用による減点処分」(小田 2018、p.245)が行われている。このように学校での普通話使用は、人々に「進了學校門兒，就到了北京城兒。(学校に入れば、北京にいたかと思った)」(王、趙、銭 2013、p.73)と冗談のように言われた。

## (2) マスコミの方言禁令

2000 年代における「方言禁令」出現の背景には、「国家通用言語文字法」公布後の普通話普及の圧力もあり、方言番組がブームとなるという動きもあった。ここでは、この二点について説明する。

2000 年の全国人民代表大会(日本の国会に当たる)は「国家通用言語文字法」を可決し、普通話の地位を民族共通語・国家通用語と明記し、普通話普及の法的根拠を明確に示した。この法律は、国家機関、学校、出版物、ラジオ・テレビ局、映画、公共の場の施設・看板、広告、商品の包装・説明、企業・機関の名称、公共サービス業、IT 製品について適用される。

このような言語法の下、各省と直轄市(日本の都道府県に相当する)は地域の実情に鑑み、「国家通用言語文字法」実施方案の策定を始めることに踏み切った。上海では、「中華

人民共和国上海市国家通用言語文字法の実施方案」が、2005年12月29日に採択され、2006年3月1日より実施され、これにより上海での上海弁の使用が厳しく規制された。とりわけラジオ・テレビ番組での上海弁は制限され、普通話を使うことが要求された。ただし、オペラ、映画、ラジオ・テレビ局などで上海弁を使用する必要がある時は、行政当局の許可のある限り、上海弁を使用することができる。また今後、上海弁のニュース番組の放送は承認されなくなることに加えて、上海弁の娯楽番組の放送は、テーマと番組の内容の違いによって慎重に決定される場合がある。

1990年代から様々な方言番組が放送され、2002年から2007年までのあいだに方言番組が次々に現れ、とりわけ2004年から2005年にかけてそれはピークに達した。ブームの一方では、さまざまな問題が起こっている。方言番組の低俗化や娯楽化傾向が強く、コミュニケーションの障害が生じ、共通語の規範性や純粋性が損なわれ、普通話の普及という国策とある程度相反すると批判されている。

2009年8月12日に国家ラジオ・テレビ総局の公式サイトで、「方言制限令」が改めて発表され、地方のオペラを除き、ドラマにおいて、革命や歴史の雄大なテーマのドラマ、子ども向けのドラマ、宣伝・教育に関するドキュメンタリーにおいて、すべて普通話を使用すること、テレビに登場する共産党指導者は普通話で話さなければならないことが決定された。この「方言制限令」は「方言禁令」と呼ばれている。

小田(2019)は、国家ラジオ・テレビ総局は方言番組に対する厳重な取り締まりを行うつもりはないが、行政の言語政策部門とラジオ・テレビ部門の間に普通話普及の政策について理解の違いがあり、それが政策転換の一要因になっていると推測している。とりわけ地方政府のリーダーたちは「方言禁令」を昇進の一つの政治的業績として押し広めたため、この措



置が行き過ぎたおそれもある。また俞(2018)は、俯瞰的な視野からみて、地方の方言番組には、非常に下品で、しかも放送を禁止すべき番組があるとも指摘している。

ところで小田(2019)と俞(2018)の研究は、中国の高齢者を対象化していない。1999年、中国の総人口のうち、普通話話すことができる人の割合は53.06%であった(「人民日報」2014年09月24日12版)。2014年の時点でも、高齢者を中心に、普通話をはかせない人口が総人口の30%(約4億人)を占めていた。ところで2021年6月2日に、中華人民共和国教育部は、中国における普通話の普及率が80.72%に達したと発表している(中国教育部)。しかし、高齢者の割合については、特に明言していない。そもそもなぜ高齢者は普通話を学ばなければならないだろうか。中国はすでに高齢化社会に入り、高齢者に寄り添える社会の構築が大きな課題となっている。実際のところ、高齢者の娯楽生活と直接に関わる方言番組はすべて取り締まるべきなのか、今後検討を深めることが求められる。

管見の限りでは、家庭と学校は若者の主な二つの方言の使用の場であり、学校での方言禁止により方言の使用の場は制限される。これは、銭(2013a)と王、趙、銭(2013)、また小田(2018)の研究結果と一致して、学校での方言禁止と若者の上海弁の継承には相関関係があるのではないだろうか。一方で、マスコミの方言禁令は高齢化社会の到来と相まって高齢者の言語生活に影響を与えるのではないか。

## 2.3 まとめ

この章では、国家レベルの言語政策が、普通話の推進を中心に行われ、方言に関する明確な方針を示さなかったことを確認した。そして学校での方言禁止とマスコミの方言禁令の考察を通じ、若者における上海弁の継承との相関関係や、高齢者の言語生活に影響を及ぼす可能性を検討した。



## 第三章 NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組み

この章では、NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組みを紹介する。ユネスコの「岳麓宣言」の採択による言語政策転換の可能性、言語の規範化に必要な 2 つの要素、正音法および正書法と関わる上海弁の「ピンイン」方案、教材と辞書について論じる。それらの取り組みにより上海弁の衰退を軽減する可能性を検討する。

### 3.1 NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組み

この節では、ユネスコの「岳麓宣言」を中心に論じる

2018 年 9 月、中国湖南省の省都長沙でユネスコと中国政府が共催した第 1 回世界言語資源保護大会において、ユネスコおよび各国政府、学術機関の専門家、学者の代表が議論し、言語多様性の保護に関する「岳麓宣言(草案)」を採択した。

2019 年 1 月 18 日、ユネスコは公式サイトを通じて「岳麓宣言」を正式に発表した。2019 年 2 月 21 日に、中国教育部(日本の文科省に相当する)、ユネスコ中国事務所、中国ユネスコ国内委員会、中国国家言語文字工作委員会は共同記者会見を開いた。「岳麓宣言」は、「言語多様性の保護」をテーマとしたユネスコ初の宣言で、「方言」について以下六つの点に論及している。

まず、従来の宣言は「方言」という用語を避けて使わなかったが、今回の宣言は「絶滅危惧言語、言語的マイノリティ、先住民言語、公用語でない言語、方言の母語話者」の順で並び、方言は「絶滅危惧言語、言語的マイノリティ、先住民言語、公用語でない言語」と同じように扱われている。また、「各国政府代表と言語政策当局、学界、代表的な文化人、情報・記憶機関、公共・民間機関、絶滅危惧言語・言語的マイノリティ・先住民言語・公用語でない

言語・方言の母語話者およびほかの専門家は、この宣言(言語多様性の保護をテーマに)を採択した。」の文言と言語多様性の保護という宣言のテーマを組み合わせると、「宣言」において言語の多様性の保護には方言の保護も含まれていることが読み取れる。

二つ目として、方言の保護だけでなく、方言の継承も強調された点が挙げられる。

三つ目として、言語多様性の保護及び促進は、方言の母語話者の潜在能力、行動力、地域主体性を向上させることに役立つことと指摘されている。

四つ目として、方言を含める言語多様性の保護・促進は、経済の発展に役立てること。

五つ目として、方言母語話者の教育を受ける権利を保障すること。

六つ目として、方言の保護と継承のための新たな方法を模索することが述べられている。

小田(2020)は、この宣言が中国の言語政策を支持していると主張し、さらにこの宣言を通じて、中国が国際的な影響力を強め、言語政策の分野で主導的な役割を希求していると分析する。

この「岳麓宣言」は中国政府とユネスコと共同で樹立した宣言である。「絶滅危惧言語、言語的マイノリティ、先住民言語、公用語でない言語」を含める言語の多様性を守るという点で法的拘束力を有すると考えられる。それは、以下の理由から説明できる。「光明日報」(2019年02月22日08版)によれば、国家言語委員会は専門家を呼び集め、宣言の草案を作り、2018年6月にユネスコに草案を提出した。2018年9月のユネスコ総会は、最初の中国側の草案の内容を十分に取り入れた草案を作成した(「光明日報」2019年02月22日)。「国家通用言語文字法」によると、国家言語委員会は、中国の言語政策を立案・実行する唯一の公的機関である。その主な機能の一つは、言語文字に関する法規、規範などを策定し、検査・監督を実施することである(朱爾明編2006)。この「宣言」は中国教育部、ユネスコと中国国家言語文字工作委员会によって採択された。さらに「中華人民共和國憲法」と「国家通

用語言文字法」によれば、すべての民族は自分の言語・文字を使用・維持する権利を持っている。言い換えると、中国における「絶滅危惧言語、言語的マイノリティ、先住民言語、公用語でない言語」の母語話者は自分の言語・文字を使用・維持する権利を有するのである。この点から見ると、「宣言」に記載した「絶滅危惧言語、言語的マイノリティ、先住民言語、公用語でない言語」を含めた言語の多様性を守るということは、中国の憲法に記された「すべての民族は自分の言語・文字を使用・維持する権利を有する」という内容と一致することから、「宣言」は一定の法的拘束力を有すると考えられる。しかしながら中国憲法に方言に関する明確な記述が見つからないため、「方言」の母語話者が自分の方言・文字を使用・維持する権利を有するかどうかは不明である。

とはいうものの、従来の国家レベルでの言語政策は方言の多様性を守ることにまったく言及していない。「岳麓宣言」は、国家言語委員会の言語政策の基本方針に変化があることを垣間見させる点で、中国の方言保護にとっては画期的である。

さらに、この宣言には二つの「価値」がある。アレント(1994)によると、ものには、「交換される目的のための市場価値(marketable value)」とその物に「固有の自然の真価(natural worth)」(アレント 1994)という二つの側面がある。このゆえこの指摘をもとに考えると、この宣言には「政治的打算」と「人類の普遍的な価値」という二つの「価値」があるといえよう。小田(2020)は、宣言が「人類運命共同体」という用語を計3回使用していることに「政治的打算」の価値を認めている。また王(2019)は、習近平が2013年3月に初めて打ち出した「人類運命共同体」の概念が、今回の宣言に取り入れられたことを評価している。この点について小田(2020)は、「中国的特徴が色濃く表出している部分」(小田2020、p.185)と評している。

また、「言語の多様性」という「普遍的価値」についても看過できない。「岳麓宣言」の成立以前に、言語の多様性をテーマとするユネスコの「宣言」は存在しなかった(王2019)。ユネ

ユネスコの「文化的多様性に関する世界宣言」(2001)は、2カ所で言語の多様性に触れている。一つ目は行動計画の第10項目「サイバースペースにおける言語の多様性を振興する」(ユネスコ 2001)である。二つ目は、行動計画の第6項目「母国語を尊重しつつ、教育のあらゆる段階において、可能なかぎり言語の多様性を奨励し、低年齢からの複数の言語学習を促進する。」(ユネスコ 2001)である。しかしながらこの宣言は文化的多様性をテーマとするものであり、言語の多様性に直接関わるものではない。

また「文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約」(2005)は「言語的多様性は文化的多様性の基本的要素である」(ユネスコ 2005)と強調したが、「条約」の目的は「文化的表現の多様性を保護し、及び促進すること」(ユネスコ 2005)である。ただしこの条約は法的拘束力を有する。「中国は、2007年1月30日に東アジアで初めて文化多様性条約を批准し、同年4月30日に国内で発効した」(清水、井上、角田 2020、p.33)。この「条約」によると、「国家は、国際連合憲章及び国際法の原則に従い、自国の領域内で文化的表現の多様性を保護し、及び促進するための措置及び政策を採用する主権的権利を有する」(ユネスコ 2005)。今回の「岳麓宣言」は「文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約」(2005)を振り返り、その文化的多様性の基本的要素である言語的多様性の重要性を強調した。

また、これまで中国の言語政策と異なり、「岳麓宣言」は、言語の異なる人たちに平等の権利を与え、方言話者に対する平等で質の高い雇用機会を増やすと強調する。しかし、これは中国で長期間にわたって行われてきた言語の貧困扶助政策と相反する。言語の貧困扶助政策とは、人々に普通話を教え、方言による貧困から退出させ、豊かにすることを目指す。

最後に、「宣言」の成立は、標準語と方言といった言語間の身分格差の問題と向き合うことにつながる。「言語とは、陸軍と海軍に使用されている方言のことである。」(Weinreich 1945, p.13 拙訳)というヴァインライヒの発言が示したのは言語と政治の関係であり、ある方言が政治権力により言語(標準語)として選ばれたら、残った方言がこの言語によって支配され抑圧され、これにより「言語間の身分格差」が生じる。これまでは、標準語の地位が方言より高いと認識されており、「言語間に社会的優劣は遍在する」(ましこ 2014, p.38)と考えられてきた。しかし標準語の地位が高いとは言え、言語の多様性を承認するならば、「言語間に本質的優劣はない」(ましこ 2014, p.38)。中国では、普通話(標準語)は標準語と国家通用語の地位を有する。それに対して方言の役割は明確ではない。「岳麓宣言」は、方言と標準語の身分格差の問題において、社会主義の中国に「不確実性の種」をまいた。中国政府がこれからどう対応するのが注目し続ける必要がある。

この宣言が採択されて以来、中国の言語政策に変化の兆しが見られるようになった。王(2019)は、中国政府が「宣言」の実現に向けて、中国言語資源保護プロジェクト第二期に取り組み、普通話および規範漢字を継続的に押し広げる一方で、中国における方言と言語的マイノリティーの言語資源を保護し、言語資源の開発および利用を促進していると強調する。

### 3.2 上海弁の「ピンイン」、教材と辞書

正音法および正書法、つまり、音声と関わる表記法と書記言語の有無は、上海弁の規範化に欠かせない 2 要素である。もちろん、文学作品も看過できない。正音法にはピンインの作成が関わり、正書法には辞書の作成が関わる。そこでこの節では、言語学的手法を用いて、呉語協会と呉語学堂の上海弁「ピンイン」の実現可能性を中心に検討する。

呉語協会は 2009 年 4 月 15 日に成立した呉語保護の初の NPO 団体であり、サイトでは上海弁「ピンイン」を含める呉語の各下位方言「ピンイン」、呉語の字典・辞書、呉語の入力法などが紹介されている。

呉語学堂は、呉語保護に関わるもう一つの NPO 団体であり、サイトは 2016 年から公開されている。呉語学堂によって作られた呉語ピンイン方案もある。その公式サイトを通じて呉語の各下位方言の字音と単語をすぐに調べ、無料で利用することができる。また、呉語のデジタル化を促進するための入力法など、実用的なツールも提供している。

呉語には独自のピンインがあり、現代漢語のピンインに頼らずとも正確に表記することができる。清朝末期から現在に至るまで、呉語のピンインは、趙元任による呉語音韻ローマ字、教会呉語ローマ字、現代呉語ラテン式ピンインなど、合計十数種類が存在している。

上海弁に目を向けると、上海弁のピンイン方案は音素のまとめ方によって異なるので公式の方案がなく、現在大きく3つに分類されている。すなわち、国際音声記号と実際の音価に基づく「現代呉語ラテン式ピンイン」、国際音声記号と呉語全体の音素体系に基づく「通用呉語ピンイン」、および現代漢語ピンイン方案をベースに上海弁の音韻特徴に合わせて修正した「上海弁ピンイン」との三種類である。呉語協会の呉語「ピンイン」と呉語学堂の呉語ピンイン方案は「通用呉語ピンイン」の代表である。

言語政策の本体計画は正音法や正書法を制定するなどを立案、実施する(秀 2013)。本章では NGO・NPO 組織の言語政策を取り上げ、なかでも呉語協会と呉語学堂によって作られた上海弁「ピンイン」の音素のまとめ方を分析し、上海弁の正音法への取り組みを紹介する。

### (1) 呉語協会の上海弁「ピンイン」



呉語協会の上海弁「ピンイン」は、尖団音の区別ができる中派(中年層が使用)の上海弁の音韻体系を用いる。

「尖団の合流」(表 1)は漢語近世音における重要な話題の一つと考えられる(中村 2010)。漢語ピンインの「j」「q」「x」で表される音が、明朝以前は二つの音素であったが、清朝中期以降にその対立を失って一つの音素に合体した。そのうち、[tsi]、[ts'i]、[si]などは「尖音」、[ki]、[k'i]、[hi]などは「団音」と呼ばれる。呉語協会は尖団音の区別ができる中派の上海弁の音韻体系を取り入れたのは、「尖団の合流」の前の漢字音を保存しようとしたからである。

表1 漢語の尖団音 (中村 2010、p.1)

例字	明代	清代後期
尖音「将」	[tsian]	[tɕian]
団音「江」	[kian]	
尖音「青」	[ts'in]	[tɕ'in]
団音「輕」	[k'in]	
尖音「西」	[si]	[ɕi]
団音「希」	[hi]	

遊(2019)によれば、上海弁の中には、年齢によって、老年層が使用する旧派、中年層が使用する中派、若年層が使用する新派の違いがある。

旧派上海弁:声母 27 個、韻母 51 個、声調 6 個(陰平、陰上、陰去、陽去、陰入、陽入)

中派上海弁:声母 28 個、韻母 43 個、声調 5 個(陰平、陰去、陽去、陰入、陽入)

新派上海弁:声母 28 個、韻母 32 個、声調 5 個(陰平、陰去、陽去、陰入、陽入)

呉語協会の上海弁「ピンイン」の声母(表 2)を説明すると、計 32 個であり、[z]声母は含まれていない。この声母表では、ピンイン記号、例字、国際音声記号の順で並んでいる。

表 2 呉語協会の上海弁「ピンイン」の声母表 呉語協会を参考に筆者が作成

	無声無気 破裂音	無声有気 破裂音	有声破 裂音	無声摩 擦音	有声摩 擦音	喉頭化を 伴う鼻音	息もれ声 を伴う鼻音
唇音	p 帮 [p]	ph 滂[p <sup>h</sup> ]	b 並[b]	f 敷[f]	v 奉[v]	'm 媽[ʔm]	m 明[mɦ]
齒音	ts 早[ts]	tsh 草[tsh <sup>h</sup> ]	-	s 燒[s]	z 曹[z]	'l 拉[ʔl]	l 來[lɦ]
舌頭音	t 端[t]	th 透[th <sup>h</sup> ]	d 定[d]	-	-	'n 那[ʔn]	n 南[nɦ]
舌面音	c 見[tc]	ch 溪[tc <sup>h</sup> ]	j 群[dz]	sh 曉[ɕ]	-	'ny 拈[ʔnɿ]	ny 疑[nɦ]
牙音	k 光[k]	kh 框[k <sup>h</sup> ]	g 狂[g]	-	-	'ng 嚶[ʔŋ]	ng 牙[ŋɦ]
喉音	' 影[∅]	-	-	h 好[h]	gh 匣[ɦ]	-	-

ここで注目すべきなのは、二種類の鼻音の対立である。表 3 に示したように、朱(2010)は、第一種の鼻音が喉頭化を伴い、第二種の鼻音が息もれ声(breathy voice)を伴うと指摘している。それに対し、曹(1990)は、喉頭化と息もれ声(breathy voice)が子音自身の区別ではなく、これらの子音に後続する母音の音声特徴であると考えている。また、遠藤(2011)は、「鼻音・流音が陰調にも陽調にも現れることもあり、その場合、呉語のように陰調は喉頭化を伴い、陽調は breathy voice で頭子音・母音が発音される現象も見られる」(遠藤 2011、p.45)と指摘する。

もし二種類の鼻音の対立をなくし、dz[dz]声母も含めると、前述の中派の声母数(28 個)と一致する。

表 3 呉語の二種類の鼻音の対立 (朱 2010)を参考に筆者が作成

	喉頭化を伴う鼻音	息もれ声を伴う鼻音
上海弁	妈 ?ma <sup>52</sup>	买 ma <sup>14</sup>
	美 ?mei <sup>34</sup>	梅 mei <sup>14</sup>
	掬 ?ɲi <sup>52</sup>	年 ɲi <sup>14</sup>
蘇州弁	网 ?mən <sup>44</sup>	门 mən <sup>223</sup>
	粘 ?ɲi <sup>44</sup>	年 ɲi <sup>223</sup>

韻母表(表 4)において、ピンイン記号、例字の順で並んでいる。声調に関する説明が  
いていない。

表 4 呉語協会の上海弁「ピンイン」の韻母表 呉語協会を参考に筆者が作成

開口呼(零介音)	合口呼(u 介音)	齊齒呼(i 介音)	撮口呼(iu 介音)
a 蟹	ua 怪	ia 写	-
o 沙		io 靴	-
y 斯		-	
-	-	i 移	-
-	u 烏	-	iu 遇
e 愛	ue 回		
au 包	-	iau 蕭	-
eu 勾	-	ieu 旧	-
ae 山	uae 关	iae 甘	-
		ie 先	
oe 干	uo 碗		ioe 捐
an 梗	uan 横	ian 阳	-
aon 剛	uaon 黄	iaon 湯	-
on 東	-	ion 兄	-
en 真	uen 昆	in 清	iuin 君
ah 鴨	uah 刮	iah 脚	
eh 黑	ueh 闊	ih 立	iuih 决
oh 讀	-	ioh 局	-
r 而 <sub>文</sub>	m 无 <sub>白</sub>	n 尔 <sub>白</sub>	ng 五

## (2) 呉語学堂の上海弁「ピンイン」

呉語学堂の上海弁「ピンイン」は、『上海市区方言志』(1988 年)に収録された中派の音韻  
体系をもとに作られたものである。「声母表、韻母表、声調、綴のルール」と題された四つの  
部分によって構成される。

表 5 呉語学堂の上海弁「ピンイン」の声母表 (呉語学堂)

[p]	p	[p <sup>h</sup> ]	ph	[b]	b	[m]	m	[f]	f	[v]	v
布帮北		怕胖劈		步盆拔		美闷梅门		飞粉福		扶奉服	
[t]	t	[t <sup>h</sup> ]	th	[d]	d	[n]	n				
胆懂德		透听铁		地动夺		拿囡内男					
						[l]	l				
						拉拎赖领					
[ts]	ts	[ts <sup>h</sup> ]	tsh					[s]	s	[z]	z
煮增质		处仓出						书松色		树从石	
[tɕ]	c	[tɕ <sup>h</sup> ]	ch	[dz]	j	[ŋ]	gn	[ɕ]	sh	[z]	zh
举精脚		丘轻切		旗群剧		粘扭泥牛		修勋血		徐秦绝	
[k]	k	[k <sup>h</sup> ]	kh	[g]	g	[ŋ]	ng				
干公夹		开垦扩		葵共轧		研我外鹅					
[∅]								[h]	h	[ɦ]	gh
鸭衣乌迂								花荒忽		鞋移胡雨	

声母表(表 5)には、子音が計 28 個ある。国際音声記号、ピンイン記号、例字の順で並んでいる。ここでは、三つの注意点について解説する。

一つ目は、この音韻体系には [dz]子音はない。なぜならば、現代の上海弁や蘇州弁は、いずれも従母[dz]と邪母[z]の区別がつかない。顔之推の『顔氏家訓・音辭篇』には、「南人以錢(従母)為涎(邪母), 以石(禪母)為射(船母), 以濺(従母)為羨(邪母), 以是(禪母)為舐(船母)。(南方の住民にとっては、錢と涎、石と射、濺と羨、是と舐の音声区別がもはやつかなくなった)」(中国哲学書電子書籍計画)とある。平山(1975)は、従母と邪母の合流は、六朝末期南方音の特色の一つであると指摘する。陳(2020)は、北部呉語(上海弁を含める)で起こった「從、邪、澄、崇、船、禪」のような声母[dz]と[z]の混同は文白異読の現象を反映していると述べている。[z]は白読で、[dz]は文読であり、文読は当時の呉語地方の強勢方言である杭州弁に由来した字音ではないかと思われる(陳 2020)。

二つ目は、漢語ピンイン方案と異なり、この音韻体系では、[b]、[p]、[p<sup>h</sup>]の有声音、無声無気音、無声有気音の対立があるので、表記するときは、国際音声記号に近い b[b]、

p[p]、ph[pʰ]で表す。それに対して漢語ピンイン方案では、[p]、[pʰ]を b[p]、p[pʰ]で表す。この点から見れば、呉語学堂の上海弁「ピンイン」は、上海弁ならではの音韻特徴を考慮に入れた一方で、漢語ピンイン方案にこだわらず、より使用者の角度に立って作られた「ピンイン方案」である。

三つ目は、[m][n][l][n̥]この4つの子音は、実際に [ʔm][ʔn][n̥l][ʔŋ] と [mf][nf][lf][n̥f][ŋf] という二つに分けられる。これは前述の呉語協会の分類と一致している。ただし、声母表の音素を減らすために表に載せていなく、注の中で記載する。

表6 呉語学堂の上海弁「ピンイン」の韻母表（呉語学堂）

[ɿ]	y	[i]	i	[u]	u	[y]	iu
知次住		基钱微		波歌做		居女羽	
[A]	a	[iA]	ia	[uA]	ua		
太柴鞋		野写亚		怪淮娃			
[ɔ]	au	[iɔ]	iau				
宝朝高		条蕉摇					
[o]	o						
花模蛇							
[y]	eu	[iy]	ieu				
斗丑狗		流尤休					
[E]	e	[iE]	ie	[uE]	ue		
雷来兰		甘械也		回贯弯			
[o]	oe			[uø]	uoe	[yø]	ioe
干最乱				官欢缓		软园杈	
[ã]	an	[iã]	ian	[uã]	uan		
冷长硬		良象阳		横光 <sub>~火</sub>			
[ã]	aon	[iã]	iaon	[uã]	uaon		
党放忙		旺		广狂况			
[əŋ]	en	[in]	in	[uən]	uen	[yn]	iun
奋登论		紧灵人		困魂温		均云训	
[oŋ]	on	[ioŋ]	ion				
翁虫风		穷荣浓					
[Aʔ]	aq	[iAʔ]	iaq	[uAʔ]	uaq		
辣麦客		药脚略		挖划刮			
[oʔ]	oq	[ioʔ]	ioq				
北郭目		肉浴玉					
[əʔ]	eq	[iʔ]	iq	[uəʔ]	ueq	[yʔ]	iuq
舌色割		笔亦吃		活扩骨		血缺悦	
[əl]	er	[m]	m	[n]	n	[ŋ]	ng
而尔耳		姆宦旤 <sub>~没</sub>		□ <sub>~奶(祖母)</sub>		五鱼午 <sub>端~</sub>	

韻母表(表 6)には、韻母が 43 個ある。国際音声記号、ピンイン記号、例字の順で並んでいる。

表 7 呉語学堂の上海弁「ピンイン」の声調表 呉語学堂を参考に筆者が作成

陰平 53	陰去 34	陰入 5	
陽去 23		陽入 12	
調類	調値	ピンイン記号	例字

陰平	53	1	刀漿司東剛知
陰去	34	5	島到獎醬水四
陽去	23	6	桃導道牆象匠
陰入	5	7	雀削説踢足筆
陽入	<u>12</u>	8	嚼石局讀食合

声調表(表 7)には、声調が 5 個ある。陰上と陰去が合流する。陽平、陽上と陽去が合流する。

綴のルールに関しては、一つ目、声母 gh の後に i で始まる韻母の場合、ghi は y と略される。例えば「有」yeu6、「藥」yaq8。ただし、i の後に母音がない場合は、yi となる。例えば、「移」yi6、「営」yin6、「葉」yiq8。

二つ目、iu で始まる韻母の場合、ghiu は yu と省略される。例えば、「雨」yu6、「雲」yun6。

三つ目、u で始まる韻母の場合、ghu は w と略記される。例えば、「回」we6、「王」waon6。ただし、u の後に母音がない場合は、wu となる。例えば、「胡」wu6。

上記の「綴のルール」は、明らかに「漢語ピンイン方案」を参考にしたものである。「漢語ピンイン方案」では、声母のない i で始まる韻母の場合、例えば、「i(衣)、a(呀)」は「yi(衣)、ya(呀)」に書くことになる。

総じて言えば、呉語協会から生まれたのち、呉語学堂により改良された上海弁「ピンイン」は「漢語ピンイン方案」に類似しているため学習者にとって親しみやすく、そしてこの「ピンイン」は呉語全体の音韻特徴を考慮しながら、上海弁に起こった音変化に対応している。また、上海弁「ピンイン」と関連する呉語のデジタル化を促進するための入力法など、実用的なツ

ールも提供している。このように、単に話されている上海弁だけでなく、オンラインで誰でも書ける上海弁になる。

### (3) 上海弁の教材と辞書

2012 年に出版された『小学生のための上海弁』は、小学生向けの初の上海弁テキストである。この教科書は生徒の発達段階に合わせて、簡単なものから複雑なものへと段階的に配列されており、本にはイラストおよび CD-ROM がついているので、小学生によく使われる単語と文を少しずつ覚えさせ、日常会話程度の上海弁を学ばせることができる。

この教材は、上海の文化を伝え、自分の考えを上海弁で表現できるように、上海の物語や童話、民謡、上海オペラを学ぶことに重きを置く。教材の「銭ピン」という上海弁ピンインは、上海弁を話す先生や親たちが正確な発音を子どもに教えるためのものであり、銭乃栄によって作られた。

また、2013 年に出版された『新上海人のための上海弁』は、新上海人をターゲットにしている。移民社会である上海では、上海弁を学ぶことで、上海文化への理解が深まると著者は考えている。

そのほか、金宇橙は上海弁による小説の『繁花』を著し、2015 年に第 9 回茅盾文学賞を受賞した。『繁花』は、戦後、文化大革命、高度経済成長期という三つの時期に上海に生きる 3 人の少年の過去と現在を描く小説で、2022 年には浦元里花が日本語訳を出版し、全編の上海弁は関西弁で訳されている。

上海弁の辞書をみると、2007 年に発売された『上海弁大辞典』は、15000 語を収録した上海弁の大辞典で、外国人や非母語話者でも上海弁を正しく発音できるように、すべて国際音声記号で表記している。『上海弁大辞典』では、「対応する漢字のない単語」に対して、『廣韻』、『集韻』などの韻書(漢字をその韻によって分類し、漢字の解釈がついた辞書)に基



づき意味的及び音韻的に合致している、もしくは最も似通っている単語、すなわち「本字」を考証する方法が用いられる。梅(1995)は、方言学における漢字の本字を考証する基本的な方法に「覓字法(字を探し訪ねる方法)」という名称を与えた。しかし、時には古い言語層の上に言語層が何層も重なった複数の発音を持つ漢字に遭遇することもある。例えば、日本語の「明」は、呉音で「ミョウ」、漢音で「メイ」、唐音で「ミン」と呼ぶ。この「明」は呉音、漢音と唐音この三つの言語層、すなわち言語層の重なった複数の発音を持つ漢字の一つである。そこでは単純な「覓字法」が効力を発揮しないこともある。そこで梅は、本字を考証する新しい方法として、「覓音法(音を探し訪ねる方法)」を提案した。この方法によれば、本字を考証する前に、まず方言全体の言語層を分け、各言語層と方言音韻の対応法則を探し出し、次に方言の発音によって字音が属する言語層を決定し、最後にその言語層で本字を考証する。

『上海弁大辞典』において、「藏東西(物を隠す)」的藏(隠す)は上海弁で「kang」と発音されるが、「覓字法」によると、『集韻』には「囡、口浪切、音亢、藏也。(囡という字は、口という字の声母と同じで、浪という字の韻母と声調と同じであり、音を表す部分<sup>5</sup>は亢で、藏という字の意味と同じである)」（『新華字典』）とあるので、今回は「囡」と記録されている。「吃飯夾小菜(ご飯を食べるとき(お箸で)野菜を挟む)」の「夾(挟む)」は上海弁で「ji」と発音されるが、『集韻』には、「兼、堅嫌切、音兼、夾持也。(兼という字は、堅という字の声母と同じで、嫌という字の韻母と声調と同じであり、音を表す部分は兼で、夾、持という字の意味と同じである)」（『新華字典』）とある。そのため、「兼」と記録されている。その他、本字が存在しない単語については、複数の専門家に意見を尋ね、『現代漢語辞典』から一つ特定の文字を選択することになる。例えば、「biao」出來(飆出來イコール射出來(噴出してきた))の「biao」の当

<sup>5</sup> 漢字の形声文字には、音を表す部分と意味を表す部分がある。

て字として「颯」が選ばれている。当て字を選ぶとき、上海弁と発音が類似している漢字が要求されている。

2009年、第2回上海方言国際シンポジウムにおいて、多くの言語学者が『上海弁大辞典』を見直し、「語れるが書かれない」52の単語に特定の漢字を与えた。例えば、「躲藏(身を隠す)」という意味の「ya」は「迓」と書き、「背曲」は「佷」と書き、「倔強」を表す言葉は「良」と書き、「气喘」を表す言葉は「吭」と書くことになる。ついに上海弁の「書き言葉のない歴史」に別れを告げたのである。

もし、呉語協会と呉語学堂の上海弁ピンインの策定は、「正音法」を作成する試みであるならば、『上海弁大辞典』の刊行は、上海弁の標準化が喫緊の課題として推進され、「正書法」や「正音法」などの規範化が着々と行われたことの証拠であると理解できる。

### 3.3 まとめ

この章では、NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組みを紹介した。まずは NGO 組織であるユネスコの「岳麓宣言」の採択によって、方言の保護と継承が課題として挙げられ、中国の言語政策における変化の兆しが現れたことがわかった。そして上海弁の規範化に必要な2つの要素、正音法および正書法と関わる上海弁の「ピンイン」方案、教材と辞書について論じ、NPO 組織である呉語協会と呉語学堂の「上海弁ピンイン」の策定、および『上海弁大辞典』の刊行により、上海弁の標準化が喫緊の課題として推進されたということがわかった。それら民間の取り組みにより上海弁の衰退を軽減する可能性が生まれている。

## 第四章 家庭における言語計画

この章では、まずは移民都市・多言語都市の上海の実態を踏まえ、個人における多言語主義と社会における多言語主義の区別を確認する。そして新老上海市民への半構造化インタビュー調査を通じ、新老上海市民の家庭や個人の言語使用と言語選択、アイデンティティ、言語態度と言語意識という三つの側面を分析し、上海弁の衰退原因を検討する。さらに家庭の言語計画から見る上海弁の衰退について論じ、その衰退を軽減するために、今後の上海の家庭における言語計画の可能性を考える。

### 4.1 移民都市・多言語都市の上海

この節では、移民都市・多言語都市の上海について、また個人における多言語主義と社会における多言語主義について論じる。

#### (1) 移民都市の上海

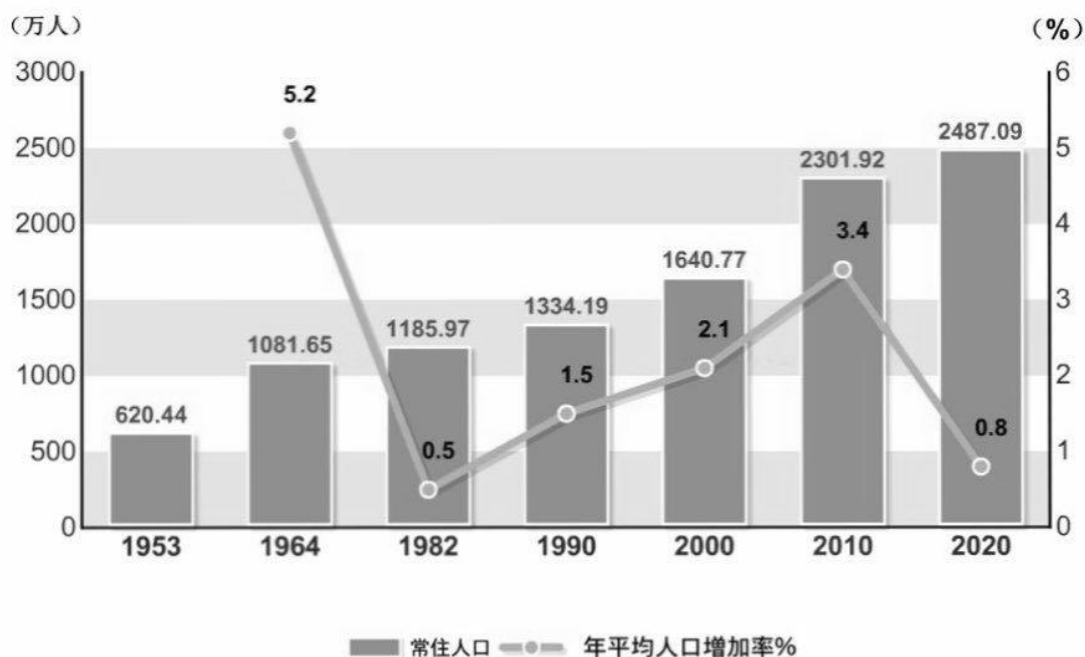
上海は今や事実上の移民都市となっている。表 8 は上海の常住人口<sup>6</sup>の変化である。2020 年上海の常住人口(約 2487 万)のうち、中国ほかの省(日本の県に当たる行政地域)や直轄市(日本の政令指定都市と類似している)からやってきた外来人口はおよそ 1050 万人で、人口の 42.1%を占めている。残った約 1400 万人(表 8)のうち、「新上海市民」、すなわちもともと上海以外の出身で、上海の戸籍をとって新しい上海人になった割合は半数以上で、改革開放の以前に上海に居住または移住した人とその子世代、すなわち「老上海市民」<sup>7</sup>の割合は想像よりもずっと低い。

---

<sup>6</sup> 中国の各種統計における「常住人口」とは、調査日時の午前 0 時に調査地域内の住居に5か月以上に渡って住んでいるか、又は住むことになっている住人(常住者)の人口である。(中国政府)

<sup>7</sup> 1949 年初め、上海の 636 平方キロメートルの土地に、すでに 540 万人が居住している。(牟 2020)

表8 上海の常住人口変化図 (上海市政府公式サイトより)



また、上海の歴史からみて、下の表9と表10の旧上海の人口変化を説明すると、1885年から1935年まで、旧上海「租界」の上海本籍地人口の割合はおよそ20%で、旧上海「華界」の上海本籍地人口の割合もおよそ25%で、旧上海の租界・華界においても、常に非本籍地人口(外国人を含む)が多い。

表9 旧上海「租界」の上海本籍地人口と非本籍地人口(1885-1935年)

年	上海本籍地人口	非本籍地人口	上海本籍地人口の割合	非本籍人口の割合
1885	15,814	93,492	15	85
1890	24,315	118,839	17	83
1895	40,470	178,886	19	81
1900	56,742	242,966	19	81
1905	67,600	322,797	17	83
1910	72,132	341,182	18	82
1915	91,161	448,054	17	83
1920	117,039	565,437	17	83
1925	121,238	660,848	17	83
1930	200,230	710,644	22	78
1935	236,477	884,383	21	79

表10 旧上海「華界」の上海本籍地人口と非本籍地人口(1885-1935年)

年	上海本籍地人口		非本籍地人口	
	人数	割合	人数	割合
1929	426,648	28	1,073,852	72
1930	436,337	26	1,255,998	74
1931	455,662	25	1,368,327	75
1932	430,875	28	1,140,214	72
1933	473,638	26	1,362,991	74
1934	488,631	25	1,426,063	75
1935	513,704	25	1,518,695	75
1936	513,810	24	1,631,507	76

鄒(1980)を参考に作者が作成

上海の外国人に関しては、上海の外国人常住人口(表 11)を説明すると、時系列で 2018 年では、およそ 17 万人になり、一番多いのは日本人、韓国人とアメリカ人であり、上海は中国で外国人が最も多い都市の一つである(上海市 2020 人口調査)。

表11 上海の外国人常住人口 上海市政府を参考に筆者が作成

類別	2005	2010	2015	2017	2018
総計	100 011	162 481	178 335	163 363	172 076
外国人居留許可	95 384	159 303	175 931	157 924	164 765
国別・地域別					
# 日 本	27 812	35 075	33 440	28 870	29 546
韓 国	14 047	21 073	21 178	20 823	21 685
シンガポール	5 547	7 545	6 421	5 786	6 033
ドイツ	4 591	8 023	8 446	7 583	7 736
英 国	2 904	5 591	6 543	5 993	6 416
カナダ	4 279	7 306	8 012	7 439	7 476
アメリカ	14 329	24 358	25 537	21 903	22 051
オーストラリア	3 729	6 165	7 444	6 995	7 110
フランス	4 181	8 238	9 993	8 659	8 936
職種別					
# 仕 事			91 372	79 701	87 525
留学			16 030	18 985	21 561
帰省			17 112	16 367	25 739
個人事業			48 915	42 769	29 845
各種メディア従業者			98	102	95
外国人永久居留		948	2 404	5 439	7 311

上海は外来人口が最も多い一級行政区(省・直轄市・自治区)で、およそ 1050 万人で、人口の 42.1%を占めている。そこで注意すべきなのは、上海の外来人口の主な出身地である。表 12 の上海における外来人口の構成を説明すると、安徽省(23%)、江蘇省(17%)、河南省(13%)、四川省(5%)、浙江省(5%)、江西省(5%)、山東省(5%)、湖北省(4%)などの人口順位である。すなわち、言語分布をみると上海では、呉語(江蘇省、浙江省)、官話(河南省、四川省、山東省)、贛語(江西省、安徽省西南部)、湘語(湖北省)などが使われている。

表 12 上海における外来人口の構成 第 7 回人口調査を参考に作者が作成

ランキング	地域	人数	比率
1	安徽	2426484	22.8
2	江苏	1798258	16.89
3	河南	1342950	12.62
4	四川	517464	4.86
5	浙江	515614	4.84
6	江西	502200	4.72
7	山东	501181	4.71
8	湖北	417652	3.92
9	福建	294823	2.77
10	湖南	237535	2.23
11	重庆	189139	1.78
12	贵州	188738	1.77
13	陕西	185178	1.74

## (2) 多言語都市の上海

外来人口によって人口の多様性が拡大したとともに、言語・文化の多様性も際立っている。上海の言語多様性は、さまざまな言語を話されているだけではなく、方言の驚くほどの多様性も示している。

しかしながら、多言語都市の上海において、言語・文化の多様性に対する態度は曖昧である。「上海の多元的文化政策は、社会の現実に対しては、まだまだ十分ではない」(郭 2007、p.107)。上海の外来人口に向けた統合政策についても、学士学位を有していない外来従業員と、高度人材あるいは学士学位を有するものに分けた関連政策を実施しており、高度人材が地元住民と同様に雇用、教育、社会保障などの公共サービスを楽しむことができる反面、外来従業員の社会保障制度の構築は不十分なので、地元住民と十分な統合がなされていない(鍾 2014)。

また、多言語都市の上海は、「社会において多言語状況を容認する理念」(庄司、2013、p.20)や、「多言語状況を奨励し、さらにそれらの平等な使用や維持を法や政策によって保障しようとする理念」(庄司、2013、p.20)を共有するヨーロッパ流の多言語主義社会ではない。ヨーロッパ流の多言語主義社会も完全無欠なものでもない。多言語主義の観点から見れば、全ての言語が平等であると認識しているものの、経済的影響力や職業などを考慮に入れると、人気のある言語と人気のない言語、あるいは大言語と小言語、文明語と土着語などに分類されている。

さらに多言語社会とは単に「多くのことばが使われている」ということだけではない。多言語性を論じるときには、「多言語状況、多言語能力・多言語使用、多言語主義・多言語政策、意識上の多言語性」(庄司 2013、p. 14) という4つの視点を忘れてはいけない。その中で社会と関わるのは「社会の多言語状況、社会の多言語主義・多言語政策」であり、個人と関わるのは「個人の多言語能力・多言語使用、個人の意識上の多言語性」である。

その中でも多言語主義とは、「複数の言語の知識や特定の社会で異なる言語が共存している状態」(福田 2017、p.102)を指す。この定義を見ると、多言語主義には、個人に関連す

「複数の言語の知識」と、社会に関連する「異なる言語が共存している状態」の二つの側面がある。

そこで本章では、移民都市・多言語都市の上海の実態を踏まえ、「個人における多言語主義<sup>8</sup>」と「社会における多言語主義」とを区別することを提案する。「社会における多言語主義」とは「多言語状況、多言語主義・多言語政策」(庄司 2013、p. 14) を指し、社会レベルの言語使用に関する内容である。ある社会において、異なる言語が使用される状況であるかどうか、多言語状況を容認・奨励し、または複数の言語を公用語として認める多言語主義の言語政策をとっているのかどうかはそのポイントである。それに対して「個人における多言語主義」とは「多言語能力・多言語使用、意識上の多言語性すなわち多言語意識」(庄司 2013、p. 14) を指し、個人レベルの言語使用に関する内容である。ある人が何ヶ国語をできるのか、また自由に切り替えることができるのか、そしてある言語に対してどうな言語意識を持っているのが、その重点である。

「社会全体」の言語使用は言うまでもなく非常に重要であるものの、全ての社会は一人一人によって構成されている。このゆえ、「一人一人の個人」の言語使用を考察することも欠かせない。

中国における「社会全体」の言語使用に関わる言語政策を見ると、国務院による「新時代の言語文字工作の全面的強化に関する意見」(中国政府)によれば、2025 年までに中国における普通話の普及率を 85%に高める目標が示されている。このように普通話普及政策の方針が短期間で変わる可能性が考えにくいということを踏まえ、本章では、「社会全体」の言語使用ではなく、「一人一人の個人」の言語使用に注目し、個人・家庭における言語計画に焦点をあてて論じる。

---

<sup>8</sup> 本稿では、複言語主義と多言語主義の分類を用いず個人と社会との多言語主義を区分する。



## 4.2 新老上海市民の言語生活の半構造化インタビュー調査

この節では、家庭・個人の言語使用と言語選択、アイデンティティ、言語態度、言語意識から新老上海人の言語生活を分析し、上海弁衰退の原因について検討する。

### (1) 調査のねらいと概要

本章では、移民都市・多言語都市の上海に居住している新老上海人が①家庭・個人の言語使用と言語選択をどのように認識し、②上海人アイデンティティをどのようにとらえるのか、③どのような言語態度や言語意識を持っているのか、④上海弁の危機に瀕した原因をどのように考え、⑤どのように上海弁を守るのかを上海人の「語り」から明らかにする。新老上海市民の語りに注目するのは、当事者である「新老上海市民」の社会ネットワークと社会資本、経済状況、居住の分布や生活習慣と行動の差異、公共サービスと社会保障の違い、そしてお互いの競争と矛盾などが上海弁の生態に影響を与えていると考えられるからである。

「語り」の考え方は、社会構成主義(social constructionism)に基づいている。これは、「世界やいわゆる「事実」というものは誰しにも同じ客観的な姿で立ち現れる「外部世界」ではなく、それぞれの認識主体によって構成されるとする立場である」(中尾 2021、p.130)。我々の現実社会は個々人によって構成される社会であるが、これまではあるモデルを構築し、社会の構造を解明しようとした。このようなモデルでみる社会は、個々人の特徴を捨象し、成員の間の等質性・いわゆる客観性を抽出しようとする多数派に合わせた社会的システムであり、現実の社会ではない。

また「言語態度」と「言語意識」の定義については次の定義を参照する。

「言語態度 ( language attitudes )とは言語に関連して生み出されるあらゆる感情や信念のことを指し、社会言語学および社会心理学の分野では、標準変種や非標準変種へ抱く心象や評価等の分析が研究分野のひとつとしてあげられる」(行森 2014、p.105)。

それに対して、「言語意識」という用語には二つの解釈がある。

①「言語意識とは、言語の性質と人間生活における言語の役割に対する人の感受性と認識である」(拙訳、Donmall1985、p.7)。

②「言語意識とは、言語に関する明示的な知識、および言語学習、言語教育と言語使用における認識と感性である」(拙訳、Association for Language Awareness2006)。

上記の解釈を踏まえて、本稿では、「言語態度」を他の方言や言語に対する態度と定義し、「言語意識」を母語や母方言に対する意識と定義する。

本研究は、上海に居住している新老上海人を対象に、普通話を用いて一人 20 分～30 分ほどの半構造化インタビュー形式による調査を 2022 年 10 月より 11 月にかけて実施した。調査協力者は合計6名(老上海人 2 名、新上海人 4 名)である。インタビューは協力者の許可を取った上で録音し、文字起こしを行い、分析し、最後に日本語に訳した。本節では、老上海人 2 人(A さん、B さん)と新上海人 4 人(C さん、D さん、E さん、F さん)のデータをもとに、議論と考察を進める。

Aさん(女性、20代前半<sup>9)</sup>)とBさん(女性、20代前半)は、上海生まれの上海育ち、母語が上海弁で普通話も話し、三世代の家族みな上海人である。Aさんの母親は会社の経営者で、Bさんの両親は会社員である。みな上海の都心に住み、自宅を持っている。

Cさん(男性、30代前半)は北地方出身で、母語が晋語で普通話も話し、大学進学時に上海にきて、大学から博士までずっと上海の大学に通い、博士在籍中にフランスへ留学を行い、大学間での複数学位制度により、二つの博士号を取り、現在は上海のあるハイテク大手企業で働いている。新上海人である。

Dさん(男性、30代前半)とEさん(女性、20代後半)は、恋人である。呉語地域の出身で、Dさんは南部呉語の方言が母語で普通話も話し、大学院の時、上海の大学院に入り、一貫性大学院博士課程4年を経て博士号を取得し、ポストドクターをその大学で行い、その後海外派遣研究者として日本のある大学で一年間の研究を進めていた。今は上海に帰って出身大学院の常勤講師である。Eさんは北部呉語の方言が母語で普通話も話し、大学進学時に上海にきて、大学院の時、Dさんと同じ大学に入り、現在は博士号を取得し、上海の同大学院で働いている。二人とも新上海人である。

Fさん(男性、20代前半)は、中部地方の出身で、安徽省の方言が母語で普通話も話し、6歳の時、両親と共に上海に定住した。小学校から大学院までずっと上海の学校に通い、現在は日本のある大学に留学している。日本に来る前には上海の郊外に住んでおり、新上海人である。

## (2) 調査結果が意味すること

これまでの分析と考察<sup>10</sup>をまとめ、さらに議論を深めてみよう。

---

<sup>9</sup> インタビューの対象者全員の個人情報を守るため、具体的な年齢を示さないこと

<sup>10</sup> それぞれのインタビューについては付録1を参照のこと

## ① 家庭・個人の言語使用と言語選択

多くの外来人口が上海に流入し、言語使用・選択に変化がもたらされている(雷 2008)。普通話、能動的であろうと、受動的であろうと、方言が異なる人々の間で最も使われやすく、上海で最も使われている共通語になっている。このインタビューからみると、普通話の使用は公の場から私的な場へ拡大している。これまでは公の場では共通語が使われ、私的な場では方言が使われた。それに対して、今は上海弁は家庭で使用されているものの、普通話も家庭で使われ始めている。

また、家庭の言語教育について、普通話を母語とする場合を除いて、子どもに地元の方言を先に学ばせたいと思っている。

また、Fさんの事例を振り返ると、Fさんは子供の時に故郷を立ち去り、母語の方言を全く使わなくなり、その後普通話が上海弁に取って代わりFさんの第一言語となった。Fさんのような普通話を第一言語とする移動する子どもも増えている。

## ② 言語態度および言語意識

インタビューの結果をみると、方言話者は、言語の多様性に関する認知や理解をある程度は持つものの、それに対して標準語話者は言語の多様性に対する関心が薄い。同時に、方言を話す地域で生まれ育った人でも、多言語能力・多言語使用には重きを置いているものの、多言語意識に慣れ親しんでいるとは言い難い。このゆえ、兪(2016)は多言語意識を育むために従来の「モノリンガル意識」を改めることの重要性を強調した。

多言語能力については、方言話者であるAさん、Bさん、DさんとEさんはみな子どもの普通話と方言の言語能力を重視するが、標準語話者のFさんは普通話の使用を重んじる。

多言語使用について、Bさんは、普通話と上海弁を自由に切り替えることができる。Aさんは、相手と話すときに「相手は上海弁が理解できるかどうか」ということを意識しながら、言語

選択を行っている。ただし「上海弁だけを使うと、他人を不愉快にさせる」と思い、さらに「時には上海弁を使ったらある種の優越感を持っているように思われる」と語っている。Aさんは多言語使用を意識したが、普通話の使用と上海弁の使用に対する態度が異なり、多言語意識を備えるのかどうかは不明である。

この事例を見る限り、多言語意識が個々人にどの程度受け入れられているのかは完全に解明することはできない。新上海人のCさんは上海弁に偏見を抱いていない。「買い物をしているときに、上海出身のおばさんから、上海弁で突然話しかけられたら、不快に思うのか」と質問すると、「なんの不快もない」と答えた。Cさんは上海弁を学びたいと思っている。一方、同じく新上海人のEさんは、市役所で事務員に上海弁で話しかけられるとイライラすることがあると語っている。

### ③ 上海人のアイデンティティ

Giddens and Sutton(2018)は、アイデンティティそのものは、生まれつきではなく相互行為・作用の過程でつくられているため、相対的に固定化している一方、多元的で安定性がなく、生涯を通じて大きな変化が起こると主張する。

実施したインタビューをみると、老上海人のAさんとBさんは自分の上海人としてのアイデンティティを誇りに思う一方、新上海人もまた上海人であると思っている。それに対して新上海人のCさん、DさんとEさんは自分を上海人と思わない。彼らによれば、北京人や上海人などをたずねることは、出身地や故郷を聞くことと同様である。大学卒業後に上海の戸籍をとった新上海人は、自分は上海に定住しているにすぎないと考え、上海人であるかどうかは人により異なる。さらに同じく新上海人のFさんは、子どもの頃に上海に移り、それ以来上海に住んでおり、間違いなく新上海人であると自己認識している。

新上海人は「上海で生きる自分」と「故郷にルーツを持つ自分」、「普通話が喋れる自分」、「方言も知っている自分」と複数の自分を持っている。Fさんは、「故郷にルーツを持つ自分」と「方言も知っている自分」が既に薄くなり、「上海で生きる自分」と「普通話が喋れる自分」が主体となることにより、上海人アイデンティティを確立した。Cさん、DさんとEさんは、「故郷にルーツを持つ自分」と「方言も知っている自分」を強く持ち、次の代に地元の方言を学ばせる一方、「上海で生きる自分」と「普通話が喋れる自分」は、主体の一部となっていないため、自分を上海人と思わない。

そのほか、Dさんのインタビューを通じて精神的な上海人も現れてきたことがわかった。Dさんによれば、精神的な上海人とは、実際に上海人ではないものの、思想や価値観、生活態度などの変化により、心のなかですでに上海人になりきったと思った人を指す。Dさんの目から見ると、もしある人が精神的に上海人だと感じているのであれば、すでに上海人になるのである。

以上の分析から、老上海人のアイデンティティは相対的に安定している一方、新上海人のアイデンティティは変化していることがわかった。さらに、新老上海人は異なるアイデンティティを有することから、それぞれが語った上海人の定義も異なる。老上海人は、新上海人であろうとなかろうと、みな上海人であると思っている。新上海人は、「上海人であるかどうか」に対してそれほど関心を示していない。その点では上海人とは何かを改めて検討する必要がある。

#### ④ 上海弁の危機に瀕した原因

これまで語られてきた上海弁の危機に瀕した原因について、普通話の普及政策、学校での方言禁止、マスコミの方言禁令を取り上げた。最初の二点についてはAさんとBさんの語

りからも再確認できた。他方では、Bさんの祖父母は上海弁のみの方言話者である。マスコミの方言禁令は、北方方言地域の出身で、生まれながらに普通話を理解できる高齢者にとって打撃ではないものの、上海人の高齢者すべてが普通話を理解できるわけではない。彼らにとっての影響は多大である。

また、学校の言語選択や学校における言語政策の重要性を指摘する必要がある。Bさんによれば、普通話の普及政策に加えて、学校には多くの上海弁を話せない子もいるため、学校で上海弁をだんだん使わなくなった。しかしながら、学校での方言使用は許可されており、方言使用に関する規定が統一されていない可能性がある。学校における言語政策は子どもたちに影響を与えるもので、制限の厳しくない学校での発言や、授業の合間のクラスメートとの会話では、方言が許容される傾向にある。

新老上海人の上海弁をめぐる認識の相違についても検討する必要がある。老上海人は、新上海人も上海弁を学ぶべきであると思っているが、新上海人は上海弁を学ぶ必要を認めていない。また、老上海人は上海弁を話すことを誇りに思う一方、新上海人には人により異なるものの、上海弁に偏見を持っている人もいる。Aさんによると、上海弁の使用が人にある種の優越感を与えたと理解される。またBさんによれば、上海弁話者が優秀であるとの先入観があり、そのため一部の上海人が羞恥心を感じ公の場で上海弁を話さなくなったこともある。

この認識の相違は、移民都市における個々人の暮らしを取り巻く経済、文化、生活習慣、社会環境の違いに帰因するものと考えられ、これは上海弁の生態を大きく左右する。

過剰な普通話普及政策は、あくまでも上海弁の衰退を加速する要因の一つとなる。なぜならば、「国民国家の形成と維持に標準語の普及が欠かせなかった」(大森、全国町村会)ことは確かであることから、標準語の普及によりもたらされた方言への抑制は、避けられない

(「中国青年報」2006年9月18日)。普通話と方言は、政治的、経済的、文化的な力によって、強弱をつけながら存在している。そのため、たとえ普通話普及政策がなくても、「言語市場」の理論に基づけば、人々は積極的に普通話を選択するだろう。

ブルデューの「言語的交換のエコノミー」の理論では、言語的交換 (linguistic exchange) を単にコミュニケーションの関係ではなく、常に象徴的な力の関係として捉えられ、「言語市場」によって言語の正統性(象徴権力)と言語資本の価値が決定される」(小林 2021、p.45)。言語市場は一種のメタファー表現である。経済市場になぞらえると、商品は市場価値の高いものとそうではないものの二つに分かれる。方言と標準語の場合、標準語は高く評価され、方言は低く評価される。そのゆえ、老上海人であろうとなかろうと、標準語を選択した人のほうが圧倒的多数派となる。

では、上海弁の衰退に直接に関わる最も重要な原因は何だろうか。そこで次節では「家庭における言語計画」を検討したい。

## ⑤ どのように上海弁を守るのか

ここで触れたのは、家庭での方言使用、セルフメディアの役割などの内容である。

Bさんによれば、早期から子どもの発達段階に応じた一貫した家庭での方言教育が求められる。Aさんによれば、短編動画アプリたとえば TikTok での上海人インフルエンサーが「滬語のアンバサダー」と自称し、上海弁で上海人にインタビューを行い、その内容をコンテンツとして活用する。

ここで興味深いのは、短編動画アプリなどのセルフメディアに関する内容である。これらの独創性や革新性に優れた技術力をもっているインターネット時代のメディアは方言に新しい生命力を与える(符 2021)。



また新老上海人の間で、上海弁の保護について異なる考え方を持っている。インタビューを受けた新上海人はほとんど無関心で、老上海人の方は、上海弁の保護に情熱を注いでいる。

### 4.3 家庭における言語計画

この節では、家庭の言語計画から見る上海弁の衰退について、さらに今後の上海の家庭における言語計画の可能性を考える。

#### 4.3.1 家庭の言語計画から見る上海弁の衰退

上海弁の衰退に直接に関わる最も重要な原因は、個人が多言語意識を持たず家庭における言語計画が十分に機能していない点にある。

インタビューの結果を見ると、老上海人にとって、子どもに上海弁を教えるか、それとも普通話を教えるか、また新老上海人にとって、子どもの開かれた言語意識を育成するのは特別な計画もなく、最後まで遂行できずに終わった。AさんとBさんの事例に関連すると、Aさんの両親は明確な家庭言語計画を施行することがなかった。また両親の潜在的意識や、顕在的意識のどちらも働いていなかった。そのため、Aさんが上海弁を完全にマスターする可能性は極めて低くなった。このため将来に上海弁は上海人自身によって話されなくなるだろう。Bさんのように家族から上海弁を継承し、現在でも上手に話すことができる人は少数である。なぜなら言語意識や信念などに影響され、暗示的で観察困難な家庭言語計画、すなわち潜在的な家庭言語計画から影響を受けたからである。Bさんの両親は明確な計画を立

てなかったが、なんとなく上海弁が大切だとの潜在的な意識が働いたので、それを行動に変えてBさんに影響を与えたのかと推測できるだろう。

親は、家庭で権威を持っているため、言語管理者として、子どもの言語選択・使用、言語教育、また言語意識に影響を与えることが多く、子どもは言語管理の対象となることが多い。そこで上記の新老上海市民の事例にもとづき、Curdt-Christiansen(2020)の家庭言語計画に影響を与える内的要因と外的要因を考慮したうえで上海人の家庭における言語計画から上海弁の衰退を分析する。

老上海人について、以下の内的要因を考察する必要がある。

第一に、上海弁によって家族間の感情的な結びつきが強まるか。第二に、上海弁は上海人のアイデンティティか。第三に、子どもを上海弁あるいは普通話、または両方とも習得させる養育信念をどれほど持っているのか、子どもの多言語意識が育まれるのかどうか。第四に、子どもの上海弁学習は主体的か受動的なのか。

また、新上海人については、以下の内的要因を考察する必要がある。

第一に、上海弁に対して、どんな感情(態度や価値づけ、例えば好きか、嫌いかな)を持つか。第二に、上海人のアイデンティティを自ら認めるか。第三に、子どもを出身地の方言あるいは普通話、または両方とも習得させる養育信念を持つか、子どもの多言語意識は育まれるのかどうか。第四に、子どもは方言や上海弁に対して積極的に関心を持つか。

さらに新老上海市民については、以下の外的要因を考察する必要がある。

第一に、出身地の方言、上海弁、普通話の地位の違い。第二に、国家の言語政策に対する政治的忠誠心。第三に、教育目標と教育言語の選択。第四に、言語学習によりもたらされる経済的利益。

新老上海市民の多言語意識、すなわち上海弁と出身地の方言、上海弁と普通話に対する態度・意識の違いをみると、それぞれの家庭における言語計画の指導理念は異なる。言語の権威や規範を重視するのか、それとも言語の多様性を重視するのかは人それぞれである。また上海人アイデンティティに対する認識の違いによって、家庭における言語計画も異なる。新上海市民は出身地の方言あるいは普通話に重きを置くが、老上海市民は上海弁あるいは普通話に重きを置く。さらに計画を策定する時に問わなければならないなぜこの計画を立てるのか、言い換えると「なぜ上海人は上海弁を学ぶのか、また学ぶべきか」という根本的な問題は回避された。このような点から、上海弁の衰退は余儀なくされたのである。

#### 4.3.2 今後の上海の家庭における言語計画の可能性

この節では、今後の上海の家庭における言語計画の可能性を考える。今後の上海の家庭における言語計画の可能性について、多言語意識を育むことの重要性、「上海人とは何か」ということを考えることの重要性を指摘する。

一点目は、多言語意識を育むことである。「地元の言葉より上海弁のほうが優れている」や、「方言より標準語・共通語のほうが優れている」などといった方言と方言、方言と共通語に対する言語意識は、家庭言語計画を疎外する困難である。他方では、多言語意識には、ある人がもっている言語能力や知識の全範囲という意味での言語レパートリーが含まれている

(Blommaert & Backus2013)。つまり、上海弁、普通話や英語を分けて考える言語能力観を複合的な言語能力として認識することが重要であるが、このような多言語意識が、現在の中国ではまだ普及していない。

二点目は、「上海人とはなにか」である。新老上海人という分け方は妥当だろうか。新上海市民や上海市民という名称の妥当性は、上海住民がともに考える課題である。なぜならば、上海という都市は、老上海人・老上海市民だけでなく、新上海市民によってもつくられるためである。

#### 4.4 まとめ

この章では、移民都市・多言語都市の上海の実態を踏まえ、「個人における多言語主義」と「社会における多言語主義」の区別を検討した。「社会における多言語主義」とは「多言語状況、多言語主義・多言語政策」を指し、また「個人における多言語主義」とは「多言語能力・多言語使用、意識上の多言語性すなわち多言語意識」を指す。

次に新老上海市民への言語生活に関する半構造化インタビュー調査を通じ、家庭・個人の言語使用と言語選択、アイデンティティ、言語態度と言語意識の側面から分析した。家庭や個人の言語使用と言語選択において、上海弁は家庭では使用されているが、普通話の使用は公の場から私的な場へ拡大し、家庭でも使われ始めていることを確認した。言語態度および言語意識において、方言話者は言語の多様性に関する認知や理解をある程度は持つものの、それに対して標準語話者は言語の多様性に対する関心が薄い。また方言話者は、多言語能力・多言語使用に目を向けているものの、多言語意識に慣れ親しんでいるとは言い難い。アイデンティティをめぐる、新老上海人による上海人の定義は異なっている。

老上海人は、新上海人も上海人であると思っているが、大学卒業後に戸籍をとった新上海人は、上海に定住しているものの、上海人であるかどうかは人により異なる。

さらに、半構造化インタビュー調査と家庭における言語計画の分析を通じ、上海弁衰退の原因について以下の考察を得た。第一に、過剰な普通話普及政策は、上海弁の衰退を加速する要因の一つとなるが、根本的な原因ではない。第二に、移民都市における個々人の暮らしを取り巻く経済、文化、生活習慣、社会環境の違いによってもたらされた上海人アイデンティティに対する認識の違いにより、新老上海市民との間に、対立と分裂が生じている。これは上海弁の生態を大きく左右する。第三に、個人の多言語意識の欠如によってもたらされた家庭における言語計画は十分に実施されていない。新老上海市民には多言語意識(方言と方言、方言と共通語に対する態度・意識)が欠如している。また上海人アイデンティティに対する認識の違いから、家庭における言語計画を策定する時に問わなければならない「なぜ上海人は上海弁を学ぶのか、また学ぶべきか」といった問題が回避された。これにより、上海弁の衰退を余儀なくされた。最後に、今後の上海の家庭における言語計画の可能性について、多言語意識を育むことや、「上海人とは何か」ということを考えることの重要性を指摘した。

## 第五章 結論と今後の課題

### 5.1 結論

本研究では、上海弁の衰退の原因を検討し、民間レベルの言語政策の可能性を考えた。

第 1 章では、絶滅の危機にある上海弁の現状、方言の保存に関する2つの立場、先行研究とその問題点、研究の目的、研究方法について述べた。

第 2 章では、国家レベルの言語政策が、普通話の推進を中心に行われ、方言に関する明確な方針を示さなかったことを確認した。そして学校での方言禁止とマスコミの方言禁令の考察を通じ、若者における上海弁の継承との相関関係や、高齢者の言語生活に影響を及ぼす可能性を検討した。

第 3 章では、NGO・NPO 組織の言語政策に関する取り組みを紹介した。まずは NGO 組織であるユネスコの「岳麓宣言」の採択によって、方言の保護と継承が課題として挙げられ、中国の言語政策における変化の兆しが現れたことがわかった。そして上海弁の規範化に必要な 2 つの要素、正音法および正書法と関わる上海弁の「ピンイン」方案、教材と辞書について論じ、NPO 組織である呉語協会と呉語学堂の「上海弁ピンイン」の策定、および『上海弁大辞典』の刊行により、上海弁の標準化が喫緊の課題として提出されたことがわかった。それら民間の取り組みにより上海弁の衰退を軽減する可能性が生まれている。

第 4 章では、移民都市・多言語都市の上海の実態を踏まえ、「個人における多言語主義」と「社会における多言語主義」の区別を検討した。次に新老上海市民への言語生活に関する半構造化インタビュー調査を通じ、家庭・個人の言語使用と言語選択、アイデンティティ、言語態度と言語意識の側面から分析した。家庭や個人の言語使用と言語選択において、上海弁は家庭では使用されているが、普通話の使用は公の場から私的な場へ拡大し、家

庭でも使われ始めていることを確認した。言語態度および言語意識において、方言話者の言語の多様性に関する認知や理解は一定程度進んでいるが、標準語話者は言語の多様性に関心が薄い。また方言話者は、多言語能力・多言語使用に目を向けているものの、多言語意識に慣れ親しんでいるとは言い難い。アイデンティティをめぐる、新老上海人による上海人の定義は異なる。新上海人は、自分は上海に定住しているものの、上海人であるかどうかは人により異なる。

さらに、半構造化インタビュー調査と家庭における言語計画の分析を通じ、上海弁衰退の原因について以下の考察を得た。第一に、過剰な普通話普及政策は、上海弁の衰退を加速する要因の一つとなるが、根本的な原因ではない。第二に、移民都市における個々人の暮らしを取り巻く経済、文化、生活習慣、社会環境の違いにより新老上海人との間に、対立と分裂が生じている。これは上海弁の生態を大きく左右する。第三に、個人の多言語意識の欠如によってもたらされた家庭における言語計画が十分に実施されていない。

最後に、今後の上海の家庭における言語計画の可能性について、多言語意識を育むことや、「上海人とは何か」ということを考えることの重要性を指摘した。

## 5.2 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、学校での方言禁止と若者の上海弁の継承との相関関係や、またマスコミの方言禁令と高齢者の言語生活に影響を及ぼす可能性についてはさらなる議論を要すること、そして家庭における言語計画の実施について個別の家庭に応じて考察する必要があることが挙げられる。なかでも次の三点で限界があり、今後の研究課題としたい。

まず第一に、学校における言語政策に対する考察が必要である。インタビューの A さんと B さんはそれぞれ別の学校に通っていた。B さんの学校では方言での禁止は厳しく制限さ

れていなかった。上海には、公立学校や私立学校に加えて、「貴族」学校や外国と共同で設置した学校もある。方言に関する各学校の言語政策や、その実施が若者の上海弁の継承に与えた影響を検討する必要がある。

第二に、マスコミの方言禁令は高齢者の言語生活に与えた影響について省ごとの考察が欠かせない。マスコミの方言禁令は、北方方言地域の出身の、普通話を理解できる高齢者にとっては打撃ではないものの、南方方言地域の出身で普通話を理解できない高齢者の言語生活に与えた影響に関する政府系のデータは乏しく、分析を行うことが不可欠である。

第三に、家庭における言語計画の実施について個別の家庭に向けたインタビュー調査を行い、かつての「一人っ子政策」、2016年からの「二人っ子政策」や、祖父母の子育ての支援などの中国ならではの特徴を踏まえて考察することが必要である。

また、本研究は質的研究による論証だけに傾いており、量的研究によるアンケート調査、例えば新老上海市民に対する量的調査などを行うことはできなかった。

これらは研究の限界と記し、今後の研究を期する。



## 参考文献

### 日本語文献（五十音順）

- 秋山薊二(2003)「社会構成主義とナラティブ・アプローチ—ソーシャルワークの視点から」  
『関東学院大学人文科学研究報』第27巻 関東学院大学人文科学研究所 編  
pp.3-16.
- アジェージュ、クロード著 糟谷啓介訳(2004)『絶滅していく言語を救うために：  
ことばの死とその再生』 白水社
- アレント、ハンナ著(1994) 志水速雄訳『人間の条件』 筑摩書房
- 遠藤光暁(2011)「アジア東部諸言語の喉頭特徴」『音声研究』第15巻第2号  
pp.40-51.
- 尾関史 川上郁雄(2010)「「移動する子ども」として成長した大学生の複数言語能力に関する語り」細川英雄 西山教行(編)(2010)『複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』 くろしお出版
- 小田格(2018)『中華人民共和国上海市における上海語テレビ放送と言語政策—ポスト標準中国語普及時代の方言放送の行方』 第41回社会言語科学会研究大会(2018年3月11日、於・東洋大学)でのポスター発表
- 小田格(2019)「中華人民共和国における方言番組に対する規制通知等再考」『人文研紀要 第92号 pp.167-196.
- 小田格(2020)「ユネスコ「岳麓宣言」と「方言」に関する一考察：中華人民共和国の事例を手掛かりとして」言語政策 第17号 pp.103-122.
- 郭潔敏(2007)「グローバル化における上海の文化発展に関する問題および対策」立命館言語文化研究 19巻1号 pp.103-109.
- ギデンズ、アンソニー/サットン、フィリップ W 著 友枝敏雄 友枝久美子訳  
(2018)『ギデンズ 社会学コンセプト事典』 丸善出版
- 木部暢子(2011)「言語・方言の定義について」『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国立国語研究所
- 木部暢子・山田真寛(2011)「消滅の危機の程度に係る判断基準・根拠について」『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』国立国語研究所

- 木村護郎クリストフ (2005) 「言語政策研究の言語観を問うー言語計画／言語態度の二分法から言語管理の理論へー」 『言語政策』第1号 pp. 1-13.
- 小林敏宏 (2021) 「グローバル イングリッシュと「英語界」の象徴システムの構造と動態についてー非英語圏日本の英語社会論の立場から」 『人文・自然・人間科学研究』第46号 pp. 37-69.
- 斉藤純男 (2010) 『言語学入門』三省堂 p. 213.
- 嶋津拓 (2011) 「言語政策研究と日本語教育」 『日本語教育』150 巻 pp. 56-70.
- 清水亘、井上乾介、角田匠吾 (2020) 「「文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約」について」 『知財ぷりずむ』第18巻209号 pp. 25-35.
- 秀茹 (2013) 「日中両言語における外来語の対照研究」 広島市立大学大学院国際学研究科 博士(学術)学位論文
- 庄司博史 (2013) 「多言語社会のとらえかたーいくつかの視点」 多言語化現象研究会編『多言語社会日本:その現状と課題』三元社
- 鍾仁耀 (2014) 「上海市における外来人口のローカリゼーションの現状およびその問題点」 『経済学雑誌』第115巻第3号 pp. 45-64.
- 中尾元 (2021) 「ライフストーリー研究の方法論、認識論(epistemology)としての人文 × 社会科学の交差点」 『人文 × 社会』第1号. pp.125-137.
- 中村雅之 (2007) 「カールグレン「Compendium」を読む(3)」 『KOTONOHA』第61号 古代文字資料館発行 pp. 1-3.
- 中村雅之 (2010) 「漢語近世音のはなし---(6)尖音と団音」 『KOTONOHA』第90号 古代文字資料館発行 pp. 1-5.
- 西山教行 (2011) 「外国語教育と複言語主義」 『Forum of Language Instructors』第5巻 pp. 3-13.
- ネクヴァピル、イジー 木村護郎クリストフ監訳 (2014) 「言語計画から言語管理へーJ.V. ネウストプニーの継承」 『言語政策』第10号 pp. 129-148.
- 朴銀姫 (2009) 「「在日」を生きること - 金鶴泳の「凍える口」をめぐる」 『千葉大学人文社会科学部研究プロジェクト報告書』第195号 pp. 1-12.
- 平山久雄 (1975) 「『史記正義』「論音例」の「清濁」について」 『東洋学報』56巻2～4号 pp. 278-309.
- 福田浩子 (2007) 「複言語主義における言語意識教育ーイギリスの言語意識運動の新たな可能性ー」 『異文化コミュニケーション研究』第19号 pp.101-119.
- 福田浩子 (2017) 「複言語主義は言語教育の何を変えたか」 『人文コミュニケーション学科論集』茨城大学人文学部紀要 第22巻 pp. 99-120.

- 彭国躍(2021)「近代上海言語景觀の生態言語学的類型－ことばの選択、接触とアイデンティティ－」『人文研究』第203号 pp.275-304.
- ましこひでのり(2014)『ことばの政治社会学』三元社
- 行森まさみ(2014)「日本人の英語観を形成する要因に関する一考察：英語教育の観点から」『異文化コミュニケーション論集 Intercultural communication review 12』pp.103-116.

## 英語文献 (アルファベット順)

- Blommaert J. & Backus. A(2013)“Superdiverse Repertoires and the Individual” In Ingrid de Saint-Georges and Jean-Jacques Weber (eds.) *Multilingualism and Multimodality: Current Challenges for Educational Studies* Rotterdam: Sense Publishers
- Curdt-Christiansen.Xiao Lan(張曉蘭) & Jing Huang (2020)「Factors influencing family language policy」 *Handbook of Social and Affective Factors in Home Language Maintenance and Development* Publisher De Gruyter Mouton
- Cao Jiannfen 曹劍芬(1990)“On Phonation Types of Initial Nasals and Some Related Considerations in Chinese Wu Dialects(論吳語鼻音聲母的發聲型對立及其他)”『第一屆國際言語處理學術會議論文集』日本 神戸 (Proc. Of ICSLP'90, Kobe, Japan, 1990)
- Caldas & Stephen J(2012)“Language Policy in the Family”In B.Spolsky (ed.) *The Cambridge Handbook of Language Policy* Cambridge: Cambridge University Press
- Donmall B. G. (ed.). (1985). “Language Awareness” *NCLE reports and papers 6* London: Centre for Information on Language Teaching and Research
- DeFrancis John (1984) . *Chinese Language: Fact and Fantasy*. University of Hawaii Press.
- Ladefoged Peter(1992) “Another view of endangered languages” *Language* Vol 68 (4) pp. 809 - 811.
- Mair.Victor H(梅維恒) (1991) . *What Is a Chinese "Dialect / Topolect"?* *Reflection on Some Key Sino-English Linguistic Terms* . Sino-Platonic Papers (29, 1991),Department of Asian and Middle Eastern Studies, University of Pennsylvania
- Hudson. R. A (1996). *Sociolinguistics 2nd Edition*. University College London
- Kaplan.Robert B &Baldauf. Richard B(1997). *Language Planning from Practice to Theory* Clevedon:Multilingual Matters
- Karlgren Bernhard(1920)“*Le dialecte de Tchang-ngan sous les T'ang(唐代長安音考)*”20: pp.1-124.

Phillipson, Robert (2003). *English-Only Europe Challenging Language Policy* Oxford University Press 2003: pp.13-23.

Schiffman H. F. (1996) *Linguistic Culture and Language Policy* New York: Taylor & Francis

Spolsky B (2004) *Language Policy* Cambridge UK: Cambridge University Press

Weinreich Max (1945) “der vivo un di problemen fun undzer tsayt” *yivo bletter* January-July p.13.

## 中国語文献 (ピンイン順)

曹志耘 (1999) 「二十世紀漢語方言的發展變化——歷史和地域的角度」 [日本] 『中國語學研究・開篇』第 19 期 pp. 14-24.

曹志耘 (2001) 「關於瀕危漢語方言問題」 『語言教學與研究』 2001 年第 1 期 pp. 8-12.

曹志耘 (2017) 「跨越鴻溝——尋找語保最有效的方式」 『語言文字應用』2017 年第 2 期 pp. 2-8.

陳忠敏 (2015) 「論 160 年前上海話聲母 [dz]/[z] 變異——兼論北部吳語從邪澄崇船禪等母讀音變異現象」 『方言』第 4 期 pp. 340-345.

陳忠敏 (2020) 「再論吳語從邪澄崇船禪母今讀塞擦音/擦音現象」 『中國語文』2020 年第 2 期 pp. 149-157.

陳章太 (2015) 『語言規劃概論』商務印書館

褚半農 (2021) 「上海方言現狀及思考——兼論滬語傳承中的媒體責任」 『上海廣播電視研究』2021 年第 2 期 pp. 78-82.

戴曼純、賀戰茹 (2010) 「法国的語言政策與語言規劃實踐——由緊到松的政策變遷」 『西安外國語大學學報』第 18 卷第 1 期 pp. 1-5.

丁柳 秦浩 於曉潔 程曉晗 王婷 董彬 (2018) 「吳方言的發展現狀及保護對策研究」 『文艺生活. 下旬刊』 2018 年第 6 期 pp. 78-79.

費筱菁 (2021) 「上海方言童謠家庭代際傳承式微成因的個案研究」 上海師範大學碩士論文

符雲梟 (2021) 「淺析方言廣播如何在新媒體時代下生存和突破」 『海外文摘』 2021 年第 18 期 pp. 122-124.

郭熙 (2005) 「面向社會的社會語言學：理想與現實」 『語言文字應用』 2005 年第 3 期 pp. 22-24.

高一虹 (2009) 「社會語言學研究：作為知識增長點的「整合」」 『中國外語』 2009 年第 3 期 pp. 14-19.

- 杭葦(1984)「從實際出發、講一點辯證法——中小學一定要推行「四用語」、加速推廣普通話的步伐」『文字改革』1984年01期 pp. 12-37.
- 許靜榮(2017)「家庭語言政策與兒童語言發展」『語言戰略研究』2017年第6期 pp. 15-24.
- 華學誠、遊帥 譯(2022)『方言』中華書局
- 蔣冰冰(2006)「雙語與語言和諧——來自上海市學生語言使用情況的調查」『修辭學習』2006年第6期 pp. 64-66.
- 雷紅波(2008)『上海新移民的語言社會學調查』復旦大學博士論文
- 李佳(2018)「「粵語」「閩南語」和「滬語」：漢語方言稱「語」的三種形成模式」『語言戰略研究』2018年第3期 pp. 72-82.
- 李榮 中國社會科學院·澳大利亞人文科學院合作編纂(1988)『中國語言地圖集』香港朗文(遠東)有限公司
- 李宇明(2022)『家庭語言規劃研究』商務印書館
- 魯國堯(1992)「「方言」的涵義」『語言教學與研究』1992年第1期 pp. 126-136.
- 麥耘(2009)「從粵語的產生和發展看漢語方言形成的模式」『方言』2009年3期 pp. 219-232.
- 梅祖麟(1995)「方言本字研究的兩種方法」『吳語和閩語的比較研究』上海教育出版社
- 牟振宇(2020)「1945-1949年間上海人口的時空數字化分析」『南京大學學報：哲學·人文科學·社會科學』2020年第5期 pp.107-119.
- 錢乃榮(2011)「新世紀的語言環境和上海話的變化」『双城記：上海、ニューヨーク都市文化』格致出版社
- 錢乃榮(2012)『小學生學說上海話』上海大學出版社
- 錢乃榮(2013a)『新上海人學說上海話』上海大學出版社
- 錢乃榮(2013b)「上海話裏的城市文化密碼——獨家對話著名滬語研究專家錢乃榮」『解放日報』2013年11月15日
- 錢乃榮(2014)『西洋傳教士資料上海方言著作研究—1847-1950年的上海話—』上海大學出版社
- 錢乃榮(2018)『上海話大詞典(第二版)』上海辭書出版社
- 孫曉先、蔣冰冰、王頤嘉、喬麗華(2007)「上海市學生普通話和上海話使用情況調查」『長江學術』2007年第3期 pp. 1-10.

- 汪平 「普通話合蘇州話在蘇州的消長研究」『語言教學研究』 2003 年第 1 期  
pp.29-36
- 王輝 (2014) 「語言管理：語言規劃的新走向——《語言管理》評介」『語言政策  
與規劃研究』 2014 年第 1 期 pp.60-64.
- 王莉寧 (2019) 「中國語保國際化的途徑和經驗」『語言文字應用』 2019 年 第 4  
期 pp.15-25.
- 王向豫 (2014) 「當代中國語言政策分析——政治學的視角」 吉林大學博士論文
- 王悅陽、趙化南、錢乃榮 (2013) 「滬語文芸：消費海派？」『新民周刊』 2013 年 26  
期 pp. 70-73.
- 謝留文 (2019) 「漢語方言研究 70 年」 劉丹青主編『新中國語言文字研究 70 年』  
中國社會科學出版社
- 邢璐、李玥、瞿瑜 (2021) 「普通話普及在家庭、學校及媒體領域對方言的影響——以  
上海話為例」『文教資料』 2021 年 10 期 pp. 202-204.
- 葉小燕 高健 (2016) 「家庭語言政策研究述評」 『語言政策與語言教育』 2016  
年 第 1 期 pp. 109-122.
- 遊汝傑 (2006) 「方言和普通話的社會功能與和協發展」『修辭學習』 2006 年第 6 期  
pp. 1-8.
- 遊汝傑 (2008) 「三十年來上海方言的發展變化」『第五屆國際吳方言學術研討會論  
文集』 上海教育出版社
- 遊汝傑 (2019) 『吳語方言學』 上海教育出版社
- 俞書敏 (2018) 「語言政策視角下的方言「禁令」研究」 上海外國語大學碩士論文
- 俞瑋奇 (2016) 「近十五年來上海青少年方言使用與能力的變化態勢及影響因素」『語  
言文字應用』 2016 年第 4 期 pp. 26-34.
- 朱爾明編 (2006) 『20 世紀中國學術大典』 福建教育出版社
- 張金嶺 (2012) 「歐洲文化多元主義：理念與反思」『歐洲研究』 2012 年第 4 期  
pp. 123-137.
- 張利華、樊春麗 (2017) 「普通話推廣大勢下方言的生存態勢調查——以吳語地區為  
例」『傳播力研究』 2017 年第 8 期 pp. 227-232.
- 張日培 (2014) 「上海人熱議上海話」『中國語言生活狀況報告』商務印書館
- 張曉蘭 (2017) 「家庭語言政策研究之過去、現在與未來」 『語言戰略研究』  
2017 年第 6 期 pp. 12-14.

- 張偉江編(1993) 1990年3月19日上海市語言文字工作委員會市教育局滬語委  
 (90)第1號文發布 『上海市中小學、幼兒園推廣普通話和用字規範化的基本要  
 求』 法律法規規章文件 『上海教育年鑑』
- 趙珩鑫(2020) 「全民推广普通话对地方方言的影响」 『教育・教学科研』 2020年  
 3期 p.10.
- 趙傑、劉永兵(2013) 「語言・社會・權力——論布迪厄的語言社會觀」 『外語學  
 刊』 第170期 pp.2-7.
- 趙元任(1948) 『國語入門』 劍橋：哈佛大學出版社
- 『中国大百科全書』出版社編輯部編(1988) 『中国大百科全書：語言文字卷』中国大  
 百科全書出版社
- 中国社會科學院語言研究所(2012) 『中国語言地圖集』第二版 商務印書館出版
- 中国語言文字使用情況調查領導小組辦公室(2006) 『中国語言文字使用情況調查資  
 料』 北京：語文出版社
- 中華人民共和國教育部『中国語言資源保護工程他民族語言調查 点總体規劃(2015-  
 2019年)』
- 周慶生(2019) 『中国言語政策研究七十年』 新疆師範大學學報：哲學社會科學版  
 2019年第6期 pp.60-71.
- 周振鶴、遊汝傑(2006) 『方言與中國文化』 上海人民出版社
- 朱曉農(2010) 『語音學』 商務印書館
- 朱晔、焦卓菁(2021) 「推普環境下的上海方言家庭代際傳承個案研究」 『天津外國  
 語大學學報』 2021年第2期 pp.98-107.
- 鄒依仁(1980) 『舊上海人口變遷的研究』 上海人民出版社

## 参考資料 (ウェブページ、新聞、記事など)

- グリーフ・サバイバー ナラティブという考え方とグリーフ <https://www.grief-survivor.com/study/narrative.html> 2022年11月24日最後閲覧
- ユネスコ(2001) 文科省訳 『文化的多様性に関する世界宣言』  
<https://www.mext.go.jp/unesco/009/1386517.htm> 2022年12月22日最後閲覧
- ユネスコ(2005) 文科省訳 『文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約』  
<https://www.mext.go.jp/unesco/009/003/018.pdf> 2022年12月22日最後閲覧
- 京都大学白眉セミナー Nathan Badenoch(2010)『言語の多様性とは何か? なぜ重要な  
 のか? 私たちに何ができるのか?』 [https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/sem/sem\\_8](https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/sem/sem_8)  
 2022年10月17日最後閲覧

<https://www.sankei.com/article/20201011-5LKUESZBINPOVFKZEQ55BFBNDU/>

2022年12月22日最後閲覧

西山教行のサイト 西山教行(2009)「多言語主義から複言語主義へ ヨーロッパの言語教育思想の展開と深化」大学言語文化教育研究センター「第21回 京田辺ランゲージ・セミナー」での講演 嗣業館第1会議室 [https://noriyukinishiyama.com/wp-content/uploads/2019/10/2010\\_conf\\_Doshisha-1.pdf](https://noriyukinishiyama.com/wp-content/uploads/2019/10/2010_conf_Doshisha-1.pdf) 2022年11月22日最後閲覧

全国町村会 千葉大学教授・東京大学名誉教授 大森 彌「課の名前を地域言葉課の名前を地域言葉で」<https://www.zck.or.jp/site/column-article/4974.html> 2022年12月9日最後閲覧

多文化な子どもの学び 母語とアイデンティティとは <https://education-motherlanguage.weebly.com/275973548612392124501245212487125311248612451124861245112392123991.html> 2022年12月8日最後閲覧

Association for Language Awareness(2006).Language Awareness.

[https://lexically.net/ala/la\\_defined.htm](https://lexically.net/ala/la_defined.htm) 2022年12月22日最後閲覧

Unesco 「Protection and Promotion of Linguistic Diversity of the World Yuelu Proclamation」(2018)

[https://en.unesco.org/sites/default/files/yuelu\\_proclamation\\_en.pdf](https://en.unesco.org/sites/default/files/yuelu_proclamation_en.pdf) 2022年11月7日最後閲覧

「人民日報」電子バージョン 2014年09月24日 12版

<http://culture.people.com.cn/n/2014/0924/c87423-25721977.html> 2022年12月22日最後閲覧

教育部(中国文科省)「中国全土の普通話普及率が80.72%に到達」

[http://www.moe.gov.cn/fbh/live/2021/53486/mtbd/202106/t20210602\\_535129.html](http://www.moe.gov.cn/fbh/live/2021/53486/mtbd/202106/t20210602_535129.html) 2022年12月22日最後閲覧

呉語学堂 <https://www.wugniu.com/> 2022年11月9日最後閲覧

呉語協会 <https://wu-chinese.com/bbs/> 2022年11月9日最後閲覧

呉語協会 呉語協会入会4周年記念に際して、加入呉語協会四周年感言 <https://wu-chinese.com/bbs/forum.php?mod=viewthread&tid=12698&page=1> 2022年11月9日最後閲覧

「光明日報」(2019年02月22日 08版)「《岳麓宣言》中的中国元素—訪起草組成員、中國語保工程首席專家曹誌耘」[https://epaper.gmw.cn/gmrb/html/2019-02/22/nw.D110000gmrb\\_20190222\\_2-08.htm](https://epaper.gmw.cn/gmrb/html/2019-02/22/nw.D110000gmrb_20190222_2-08.htm) 2022年12月22日最後閲覧



上海市人民政府 『中華人民共和國上海市國家通用言語文字法の實施弁法』 上海市  
實施《中華人民共和國國家通用語言文字法》辦法 2005

[https://www.shqp.gov.cn/cgjc/cgjc/upload/202109/0924\\_161718\\_138.pdf](https://www.shqp.gov.cn/cgjc/cgjc/upload/202109/0924_161718_138.pdf) 2022 年 11  
月 2 日最後閱覽

上海市人民政府 市政府新聞發布會介紹上海市第七次全國人口普查主要數據情況

[https://www.shanghai.gov.cn/nw12344/20210518/001a0cef127c499eb381fa8dc3208e95.  
html](https://www.shanghai.gov.cn/nw12344/20210518/001a0cef127c499eb381fa8dc3208e95.html) 2022 年 11 月 20 日最後閱覽

「常州日報」 上海話告別「無字史」 52 個「寫不出的字」(2009)

[https://epaper.cz001.com.cn/site1/czrb/html/2009-01/09/content\\_165158.htm](https://epaper.cz001.com.cn/site1/czrb/html/2009-01/09/content_165158.htm)2009  
年 1 月 9 日 2022 年 11 月 14 日最後閱覽

新華字典 囡 <http://www.ziqqq.com/zidian/ODI1Nw==.html> 2022 年 12 月 22 日最  
後閱覽

新華字典 兼 <http://www.ziqqq.com/zidian/NjMzOQ==.html> 2022 年 12 月 22 日最  
後閱覽

「寧夏日報」 「溝通, 從普通話開始」

[https://szb.nxrb.cn/nxrb/pc/con/202209/16/content\\_37348.html](https://szb.nxrb.cn/nxrb/pc/con/202209/16/content_37348.html) 2022 年 12 月 22  
日最後閱覽

新民周刊 上海話大詞典問世(2007) <http://www.sina.com.cn> 2007 年 07 月 11 日

2022 年 11 月 14 日最後閱覽

中國國務院 『中華人民共和國憲法』

<http://www.gqb.gov.cn/node2/node3/node5/node9/userobject7ai1273.html> 2022 年  
12 月 16 日最後閱覽

「中國青年報」 「推廣普通話不等於消滅方言」 2006 年 9 月 18 日

[http://zqb.cyol.com/content/2006-09/18/content\\_1512951.htm](http://zqb.cyol.com/content/2006-09/18/content_1512951.htm) 2022 年 12 月 22  
日最後閱覽

「中國社會科學報」 「家庭語言政策研究迫在眉睫」 2015 年 12 月 22 日第 871 期

[http://sscp.cssn.cn/xkpd/yyx\\_20148/201512/t20151222\\_2792597.html](http://sscp.cssn.cn/xkpd/yyx_20148/201512/t20151222_2792597.html) 2022 年 12  
月 22 日最後閱覽

中國政府 「國辦印發意見:到 2025 年普通話在全國普及率達到 85%」

<https://m.gmw.cn/baijia/2021-12/01/35350620.html> 2022 年 12 月 22 日最後閱覽

中國中央政府 『國家通用語言文字法』 <http://www.gov.cn/ziliao/flfg/2005->

[08/31/content\\_27920.htm](http://www.gov.cn/ziliao/flfg/2005-08/31/content_27920.htm) 2022 年 12 月 16 日最後閱覽

中國新聞網 上海部分場合限制方言使用 不增設方言新聞節目(2006)

<https://news.sina.com.cn/c/edu/2006-02-23/09578281630s.shtml> 2022 年 11 月 2 日最後閱覽

「文匯報」 世界最大語言資源庫是如何建成的？

<https://wenhui.whb.cn/third/baidu/202108/01/417199.html> 2022 年 12 月 22 日最後閱覽

「北京青年報」 廣電總局「方言禁令」引爭議(2009) 日本語訳:放送局の「方言禁止令」が物議を醸す(2009 年) <https://yule.sohu.com/20090717/n265287130.shtml> 2022 年

11 月 3 日最後閱覽

聯合國教科文組織 「保護和促進世界語言多樣性 嶽麓宣言」(2018)

[https://en.unesco.org/sites/default/files/yuelu\\_proclamation\\_ch.pdf](https://en.unesco.org/sites/default/files/yuelu_proclamation_ch.pdf) 2022 年 11 月 7 日最後閱覽

吳語學堂 上海方言拼音方案 <https://www.bilibili.com/read/cv11774113/> 2022 年

11 月 11 日最後閱覽

# 付録1 新老上海市民の言語生活の半構造化インタビュー調査の内容

## 調査結果と考察

調査協力者の回答を、「家庭・個人の言語使用と言語選択」、「言語態度と言語意識および上海人アイデンティティ」、「上海弁の危機に瀕した原因」、「どのように上海弁を守るのか」の5つに分類し、以下で分析する。

### <事例1> Aさんの語り

#### ① 家庭・個人の言語使用と言語選択

Aさんは、大学生で毎日学校生活を送り、ほとんど普通話を使っている。上海弁は上手ではないが、父と母、祖父母がみな流暢に上海弁を話せるので、家に帰って家族と話すときは普通話から上海弁に切り替えた。たまに上海人学生の友達と一緒にいる時、上海弁を使うこともあるが、それはごく少数で、ほとんど普通話である。同世代の友達の言語能力を聞くと、Aさんはこう語っていた。

筆者: 前回も言ってくれましたけど、Aさんの上海弁はピジン上海弁っぽくて、お友人の方でも、そうなんですか？

Aさん: それは人によると思います。というのも、家庭での育てられ方に関係していると思います。もしこの人が祖父母の世代に育てられていれば、おそらくもっと上手になるでしょう。逆に私と比べて全然ダメな子もいます。

他方では、家庭の言語選択は、言語教育や言語習得に関わっている。先に方言を学ぶか、それとも普通話を学ぶかについて、Aさんの回答は以下である。

筆者: 仮の話ですが、もしあなたに子どもがいて、子どもの言語について選択のチャンスがあったとしたら、まず上海弁を選ぶか、普通話を選ぶか、それとも両方とも教えますか。

Aさん: 私自身の考えとしては、子どもに二つの言葉を話せるようになってほしいのですが、もし実行するならば、まず上海弁を教えた方がいいと思います。なぜなら、普通話はいつでもどこでも使えるのですが、上海弁の言語力は今の状況から見ればちゃんと鍛えられなくなるかもしれないので、まず子どもと一緒に上海弁を使いながら、コミュニケーションをとることが大事なんですね。

Aさんの回答から、多言語使用の重要性が強調されたことがわかった。

## ② 言語態度および言語意識、ならびに上海人のアイデンティティ

上海弁と普通話の使い分けについて、Aさんは、以下のように語った。

Aさん: 上海はとにかく寛容で包容力のある大都市です。仕事、生活、学習のために、他の地方から来た人がたくさんいるでしょう。ここで出会った人は全て上海人ではないし、出会ったとしても必ずしも上海弁を話せるわけではありません。例えば、私が社会人として働いたら、上海人の同僚と一緒に食事をすれば、上海弁でコミュニケーションをとることができますが、他の上海弁のわからない同僚がいたら、普通話を使うほうがいいでしょう。上海弁だけを使うと、他人を不愉快にさせると思います。

この回答から A さんが「相手は上海弁が理解できるかどうか」ということを意識しながら、言語選択を行ったことが窺える。また、「上海弁だけを使うと、他人を不愉快にさせる」という話から見れば、周りの人の上海弁に対する評価にばらつきがあるという推測ができる。

A さんは、上海弁に対して高い言語意識を持っている。A さんの話によると、もしこの都市に住んでいる人がその都市の方言すらも話せなければ、その都市が徐々に忘れられていくのである。A さんの考えでは、上海上海弁によって結ばれたのである。

しかしながら、A さんが語った「滬語」という言葉は、時によって人に迷惑をかける言葉となる。滬(こ)は古代上海の略称の一つであり、上海では、「滬語」と「普通話」という呼び方は地元の人とよそ者の「アイデンティティーのラベル」になっている(李 2018)。また、「時には上海弁を使ったらある種の優越感を持っているように思われる」や、「私の見解で言えば、特異な才能がないと新上海人になれない」などといった話からは、新老上海人がお互いに偏見を抱いて相手に差別的な発言をしたことがわかる。

もう一方で、A さんは上海弁を学びたい新上海人に対して寛容さを示している。

筆者: 地方の人が上海弁を学ぶのは難しいと思いますか? 上海弁の発音は普通話とはかなり違うからですね。

A さん: 難しいところがあると思います。というのも、私のおじの妻は四川省出身で、その後上海に嫁ぎ、上海弁を勉強し始めたのです。彼女の上海弁を聞いて、少し発音は違うかもしれませんが、日常のコミュニケーションの妨げになるほどではないと思います。今の上海は多様な価値を受け入れる都市なので、なまりのある上海弁を話すから周りに変な目で見られることはありません。

「上海人は上海弁を話さなければならないのか」という質問に対して、Aさんは絶対とは言い切れないと答えた。実際の状況を見ると、誰ももっと普通話と話しているので、上海弁を話さなくても生活に支障がないとAさんは思っている。

新上海人に対してどのように認識しているかを尋ねると、Aさんは、新上海人のことをよく知らないが、特異な才能がないと新上海人になれないと答えた。Aさんの考えでは、彼らが上海のことをよく理解した上で、新上海人になるのである。Aさんの目から見ると、すでに上海の価値観を認めてから上海にきたので、上海の文化を軽んじるようなことはしないはずである。

### ③ 上海弁の危機に瀕した原因

上海弁の危機に瀕した原因について、Aさんは「普通話を普及させる政策と深く関わっている」と言っている。また大都市の上海に対する人々の認識のずれを指摘した。たとえば、「周りからよそ者扱いされてなじめなく感じた冷たさ」や、「時には上海弁を使ったらある種の優越感を持っているように思われる」など、それらも人々を上海弁から遠ざける理由の一つに含まれている。また学校での方言禁止について、以下のように語った。

Aさん:私の世代からは、普通話の普及を推し広めるため、学校では上海弁を話してはいけないことになっていました。教室では、ほとんど普通話で話したから、私の上海弁は時々つまずいて、あまり流暢ではなく、たまにはある単語を忘れてぱっと上海弁がでてこない時もあります。この時、代わりに普通話を使うんです。

A さんの話から、学校での方言禁止により上海弁の継承に問題が生じることがわかった。

#### ④ どのように上海弁を守るのか

「もし上海弁を守りたいのであれば、何か良い対策はないのでしょうか？」の質問に対して、A さんは次のように語った。

A さん: まあ、実際に、この方向に向かって努力している人がすでにいます。短編動画アプリたとえば TikTok での上海人インフルエンサーが「滬語のアンバサダー」と自称し、彼らのほとんどのビデオでは上海弁を使っています。上海弁で上海人にインタビューを行い、その内容をさまざまなコンテンツとして活用しています。上海弁を守りたいのは彼らの努力の原点です。というのも、この都市に住んでいる人がもしその都市の方言すらも話せなければ、その都市が徐々に忘れられていくような気がするんです。

ここで興味深いのは、短編動画アプリなどのセルフメディアに関する内容である。これらの独創性や革新性に優れた技術力をもっているインターネット時代のメディアは方言に新しい生命力を与える(符 2021)。

#### <事例 2> B さんの語り

##### ① 家庭・個人の言語使用と言語選択

B さんの家族はみな上海人で、一緒にいる時は上海弁を話す。B さんの祖父母の普通話是非常に下手で、普通話を話すと、何も理解できない。これは 2.2 節で論じたマスコミの方言禁令に関連するもので、このような措置は B さんの祖父母のような中高年齢層の言語生活

に直接に影響を与えた。普通話が下手な高齢者にとって、方言番組は自分に笑いやひと時の安らぎをもたらすもので、それが禁じられたことは彼らの娯楽生活に被害を受けた。

Bさんは、家ではいつも上海弁を話すので、ピジン上海弁っぽいと言われたことがない。ピジン上海弁は普通話なまりの上海弁である。時折ある単語を普通話寄りの上海弁で発音して家族にからかわれたこともある。また蘇州に親戚がおり、ゆっくり話せば親戚の蘇州弁を少しは理解できるが、早口で話せば理解できない。

Bさんの話によると、周りの親戚の子どもたちは、上海弁など話さなくても大丈夫だし、今の時代では、上海弁と普通話、どちらでも構わないと思っている。この子どもたちは、上海弁を上手く話せない、もしくはまったく話せなくなった。

Bさんは外出するときや、何かを買うとき、年上っぽい人や上海人っぽい人に会ったら、上海弁で話す。もし若者と一緒にいたら普通話で話す。バイトする時は、相手が上海弁を話さない限りは、すべて普通話で応答する。これらの場面からわかるように、家庭以外の場所で上海弁の活躍の場は少なくなっている。

クラスメートの上海弁について、Bさんはこう語った。

Bさん：小学校の時はおぼつかない記憶ですが、中学校、高校の時、年齢が上がるにつれて、クラスに上海人が少なくなった気がします。

Bさんの話から、移民都市の上海に起こった外来人口流入の状況が垣間見えた。

若者の上海弁について、Bさんの話は、以下の通りである。



B さん:たとえみんな上海人だと分かって会話をしても、友達同士の間で上海弁を話すのはまだ珍しく、普通話に慣れていませんから。たまに冗談を言うときとか、上海弁を混ぜて話します。今上海弁の発音は簡素化している一方で、若者みんなそうだったかもしれません。

実際のところ、言語学の観点から見ると、3.2 節で述べたように、上海弁の中には、年齢によって、老年層が使用する旧派、中年層が使用する中派、若年層が使用する新派の違いがある。B さんが語った「上海弁の発音は簡素化している」というのは、若年層の新派の上海弁である。遊(2008)は、上海弁の激しい変化は言語の音韻編などの内的要因だけではなく、普通話普及政策や移民社会などの外的要因にも関わっていると述べ、さらに主流となった普通話の音韻体系は上海弁に影響を与えたと指摘する。

B さんは同年齢の人と比べて、上海弁が得意だと思っている。また自分の普通話と上海弁を自由に切り替えることができる。方言を学んだ後で普通話を学ぶと、方言なまりの普通話が身につく、それは将来の就職活動に不利益をもたらす可能性があるという考え方(「寧夏日報」2022 年 09 月 16 日)は強固に存在する。B さんの例を見ると、生まれつきの母語は上海弁で、それに方言の訛りなく普通話も流暢に話せるので、この種の考え方に対する反論といえよう。

家庭の言語教育について、「もし将来子どもができたなら、まずは普通話、それとも上海弁を習わせるのか、自分なりにどんな考え方があるのか」と質問すると、B さんは、まずは上海弁だと答えた。この答えから B さんの母語意識が確認できる。

## ② 言語態度および言語意識、ならびに上海人のアイデンティティ

Bさんの両親は、上海弁に対して高い潜在的な言語意識を持っている。この潜在的な言語意識は、すなわち明確な指針がなく、なんとなく子どもに上海弁を使用させることが重要である意識である。

筆者:子どもの時に、お父さんやお母さんから、なぜ上海弁が大事なのかという意識とか、そういうことを伝えられたことはありますか？

Bさん:言ったことがないんですが、ただ小さい頃から無理やり上海弁を喋らされてたんです。

両親の高い潜在的な言語意識は、Bさんの上海弁を完全にマスターすることとつながると考えられる。

Bさんの話によると、地方からの人はかつてから上海人(老上海人)に対して無意識の偏見を持ち合わせている。Bさんの話では、上海弁を話せる人のほうが優秀であるという先入観があってから、一部の上海人が恥ずかしく感じてかえって公の場で上海弁を話さなくなった。

Bさんは上海弁を聞くと自然に親近感が湧くが、上海弁を話す人が少なくなってしまうことを実感し、上海弁を次の代に必ず受け継いでいかないといけないと思っている。

そのほか、地方からの人にとって上海弁の発音が非常に難しいことを、Bさんは否定していない。

「上海人は上海弁を話さなければならぬとお考えですか」と質問されると、Bさんは以下のように答えていた。

Bさんは:今の上海には新上海人と老上海人がいて、基本的に新上海人は地方から来た人で、上海弁は話せません。新上海人だと言っても、可能であれば少しでも上海弁を勉強した方がいいと思います。何しろ新上海人になったのに、上海弁もしゃべれないとちょっと。話せなくても音声聞いて意味がわかる程度での上海弁力が必要ですね。

Bさんによれば、老上海人はずっと上海に住んでいるので、上海は彼の家である。それに対して、新上海人は外来人口の群れで、老上海人に向かって、上海弁を使わないように言うのは、無礼である。

Bさんは、上海弁は上海の文化なのであると思っているものの、上海弁を使って上演される上海オペラをほとんど観賞しない。

### ③ 上海弁の危機に瀕した原因

学校での方言禁止について、Bさんによると、普通話の普及政策に加えて、学校には多くの上海弁を話せない子もいるため、学校では上海弁をだんだん使わなくなった。しかしながら、Aさんの話と異なり、学校での方言使用は許可されており、学校における方言使用に関する規定が統一されていない可能性がある。学校における言語政策が子どもたちに影響を与えており、制限の厳しくない学校での発言や、関係が近いクラスメートとの会話では、方言が許容される傾向にある。

### ④ どのように上海弁を守るのか

下記のように、Bさんは、上海弁を守るためにセルフメディアの役割が必要不可欠だと思っている。

B さん:私は、TikTok で非常に好きな何人かのインフルエンサーをフォローしています。彼らが一生懸命に上海弁を守ろうとしていて、そうやり続けていますから。そして彼らが話している内容もとても面白いです。

また、上海弁の継承について、早期から子どもの発達段階に応じた一貫した言語教育の重要性が強調されている。

B さん:子どもは小さい頃からしっかり上海弁を学んでおかないと、今になって上海弁の大切さを強調されても遅れだと思えます。大人になって自ら上海弁を学びたいと思えば別ですが、そうでなければかなり難しいのではないかと思います。

### <事例 3>C さんの語り

#### ① 家庭・個人の言語使用と言語選択

C さんは上海弁を全く話せない。C さんの勤務先は上海の国有企業なので、上海人の割合が非常に高く、上海人同士ではよく上海弁でコミュニケーションを取っているが、C さんなど上海弁がしゃべれない同僚と関わる場合には、自然と普通話に切り替える。C さんによると、新上海人にとってこの状況は特別なものではない。

#### ② 言語態度および言語意識、ならびに上海人のアイデンティティ

Cさんは河南省出身であるが、住んでいる地方で使われたのは河南話ではなく、晋語である。Cさんによれば、母語は晋語でもあり、河南話でもある。李栄氏は入声韻尾の有無を基準に晋語を北方方言<sup>11</sup>から独立させたが、Cさんの目から見ると、どれもこれも大差ない。

Cさんはかつては方言を話すと、恥ずかしかったが、年を重ねるにつれ、また河南話が上手な人を身近に感じ始め、聞いたらとても気持ちがいいので、勉強したくなった。また、祖父の実家では河南話を使うため、それを覚えておけば、現地に行ったときにスムーズにコミュニケーションが取れると思っている。今は、河南省出身のルームメイトと一緒に住み、河南話話すこともある。普通話よりも、心を温める方言に憧れるようになり、Bさんは原点に立ち返り、自らのアイデンティティを再認識することができるようになった。

上海弁に対する言語態度について、Bさんは偏見を抱いていない。「買い物をしているときに、上海出身のおばさんから、上海弁で突然話しかけられたら、不快に思うのか？」と質問されると、「なんの不快もない」と答えた。

Bさんは上海弁を学びたいと思う一方、難しすぎて完全にマスターできないかとも心配しているが、簡単な上海弁の日常会話をいくつか覚えようと決めた。

上海人のアイデンティティについて、「上海人ですか」と質問されても、上海人ではないとBさんは回答する。

Cさん:そう、私の潜在意識の中では、あなたがどんな町で育ったかを聞いているのだと思ったからです。実際に、上海の戸籍を取っても、上海出身とは言わず、生まれ育った場所を言う人が多いのです。相手に問い詰められてどうしても回避できない時は、自分は上海の戸籍を取った新上海人で、故郷はどこどこって言います。

---

<sup>11</sup> 北方方言では入声韻尾がほとんど消えた。

Bさんの考えでは、なにになに人に対する質問は、人の故郷や出身地について尋ねることである。

### ③ 上海弁の危機に瀕した原因

上海弁の危機に瀕した原因について、Bさんは次のように考えている。子どもたちは、3～4歳から幼稚園に通い始め、幼稚園内で普通話話すのが普通となり、普通話をより多く話すと、自然にだんだん上海弁を使わなくなった。地方出身であるBさんの世代は学校で普通話話すものの、外にいるときはほとんど地元の方言を話す。上海に居住している現在では、学校にいるときも、また買い物や街に出るときも普通話話す、ただ家族といるときは少し上海弁を話す。原因がそこにあるのではないかとBさんは考えている。

### ④ どのように上海弁を守るのか

触れていない。

## <事例4> DさんとEさんの語り

### ① 家庭・個人の言語使用と言語選択

Dさんは上海人でも理解できない南部呉語の方言を話す一方、上海弁の8割は理解できる。内容を理解できるものの、上海弁の口頭表現能力はなく、生活の中では上海弁を使わず普通話でコミュニケーションを取っている。

それに対し、Eさんは北部呉語地域の出身で、上海弁を聞き取れ、簡単な単語を使えるものの、本物の上海弁ではないことから、からかわれることを心配して、あまり使わない。

EさんとDさんの大学では、上海人の同僚は普通話話すが、年配の教師は上海弁をより多く話す。また、もし教師全員が上海人であれば上海弁の使用を優先させる。知らない人と会ったらまず試みに上海弁を使い、もし上海弁で返事をもらえないならば、普通話でコミュニケーションをとる。しかしEさんによると、若い教師は上海人であっても、普通話をよく多く使っている。ただし相手が上海弁で話しかけてくれたら、上海弁で応答する。

またこの大学には、一人の上海人の先生がいて、この先生は学校で上海弁を優先させるべきだと考えており、クラスに5人上海弁のわかる人がいれば、上海弁で授業を進める。Dさんはこの措置は不適切だと思うが、この先生は独自の理論を持っており、もしクラスの5人が広東語を理解していれば、広東語で授業を進めるべきだと思っている。この先生は言語の多様性を重視しているが、Dさんはそれは教室の秩序を乱すことに繋がると思っている。

EさんとDさんは皆、子どもに先に方言を学ばせるべきだと考えているが、どの方言を最初に学ばせるべきかは議論の焦点となる。Dさんは南部呉語で、Eさんは北部呉語で、そして二人とも上海に住んでいる。そこで南部呉語を学べばいいのか、北部呉語を学べばいいのか、それとも上海弁を学べばいいのかは問題となる。EさんとDさんの解決策として、まずは数年間をかけて子どもにDさんの南部呉語を学ばせ、さらに数年間をかけてEさんの北部呉語を学ばせる。上海弁は考慮に入れていないし、普通話は教えない。なぜならば、幼稚園や小学校の先生が普通話を教えてくれるからと答えている。

## ② 言語態度および言語意識、ならびに上海人のアイデンティティ

上海弁に対する言語態度について、いきなり知らない人に上海弁で話しかけられたら、不快に感じるのかと質問すると、Eさんは、以下のように語った。

Eさん:とくにないんです。ただし市役所へ何かをしに行ったときに、新老上海市民の立場に立って来るもの拒まずで対応しなければならないので、事務員が上海弁を話すとイライラすることがあります。

筆者:周りに上海弁が話せないから昇進できないとか、そういうことはないんでしょうか？

Eさん:まあ、漠然とした印象ではあるが、公務員の場合、地元の上海人のほうが好まれるでしょう。それ以外はほとんどないんです。

以上の発言から、Eさんが上海弁に嫌いや聞きたくはないなどバイアスがかかっていないのことがうかがえる。

上海人のアイデンティティについて、DさんもEさんも自分は上海人ではないと思っている。Dさんは浙江省出身で、上海で戸籍を取得したのだけでなく他の都市で一度戸籍を取得したことがある。Eさんも浙江省出身で、自分を上海人とは思わない。前述の家庭の言語教育に関する二人の考えから、アイデンティティと言語選択の関係性が一層明らかになっている。浙江人のアイデンティティを持ち、母語への深い愛着と切実な思いがあったからこそ、子どもにおのおのの母語(北部呉語、南部呉語)を覚えさせようとしたのではないだろうか。とりわけ上海という異郷に立たされた時にその気持ちが一層強くなるだろう。

この二人から見ると、上海は包容力のある大都市であるが、時折、よそ者嫌いの一面もあり、地元の人とよそ者との衝突も絶えず存在する。

Eさん:上海に長く住まなくとも、学生として勉強するだけであれば、上海は比較的寛容な都市だと思います。ただし、ゆくゆくはここに長く住むと、たとえば野菜市場に行くところ、病院に行くところ、そして市役所へ何かをしに行くところ、なんというか、上海人は上海人、彼は彼、



それからよそ者はよそ者というような気がするのです。特に年配の上海人にとって、よそ者の私たちは彼のリソースを奪い、あるいは彼らと競い合う存在です。

D さん:私が子どもの頃に上海を訪れた時は、よそ者嫌いはもっと深刻でした。その時に上海人から上海弁でよく言われるのは「田舎者だ」という言葉でした。でも今は言わなくなったので、これも進歩だと思いますね。

上海人は上海弁を話さなければならないのかと尋ねたら、二人ともから以下のような答えが返ってきた。

Dさん:上海人は文化的なアイデンティティですので、血統、あるいは上海弁で決まるわけでもありません。

E さん:しかし上海弁はある程度、上海の文化を表しています。上海に長く住むと、上海弁を話すことから逃れられないと思います。

そのほか、精神的上海人にも触れた。精神的上海人とは、実際に上海人ではないものの、思想や価値観、生活態度の変化により、心のなかですでに上海人になりきったと思った人のことを指す。D さんによれば、もしある人が精神的に上海人だと感じているのであれば、すでに上海人になってしまう。アイデンティティは変えられるのである。

### ③上海弁の危機に瀕した原因

触れていない。

#### ④どのように上海弁を守るのか

触れていない。

#### <事例 5>Fさんの語り

##### ① 家庭・個人の言語使用と言語選択

Fさんは6歳くらいのときに地方から上海に連れられてきて、その後、上海の小学校、中学校、高校、大学を上海で過ごし、上海人であると思っている。Fさんは地方からの人が多い上海の郊外に住んでおり、市内は地元の人が多い。

Fさんによると、学校では上海弁ではなく、普通話話す。たとえ上海弁ができて、基本的に普通話話す。大学からは上海弁を話す人が増えてきたようであり、また大学では授業中で上海弁を話すことにこだわる先生がいるとの話も聞いたことがある。

家庭の言語教育について、Fさんの両親は注意を払っていなかったようである。

筆者:ご両親は家にいるときに少しでも上海弁を習わせてあげようとは思わなかったのでしょうか?それとも、自分でちょっと上海弁を勉強してみようとか、そういうことは考えなかったんですか?

Fさん:必要がないので、学ばなかった。

将来の子どもの言語教育について、子どもに普通話を教えるのか、地方の方言を教えるのか、それとも上海弁を教えるのかと質問すると、Fさんは普通話を教えると答えた。

##### ② 言語態度および言語意識、ならびに上海人のアイデンティティ

F さんによれば、上海人として上海弁を話さなくても構わない。上海人のアイデンティティにおいて、最も重要な要素は言語ではなく、人脈である。すなわち人間関係の中で上海人の帰属意識は高められてきた。

F さんは、母語として身につけたのは方言であったが、6歳の頃上海に来てから、学校、家庭や日常生活のあらゆる場面で普通話が求められたため、今はもう、ほとんど方言を話せない。故郷の方言に直ちに触れる機会が少なくなり、故郷での印象が薄れてしまい、逆に普通話が母語のようになった。このような移動する子どもたちにとって、母語は必ずしもイコール第一言語ではない。F さんの母語は地方の方言であるが、今の第一言語は普通話である。

### ③上海弁の危機に瀕した原因

触れていない。

### ③ どのように上海弁を守るのか

F さんによれば、方言には天然記念物や資料としての価値があるが、社会状況の一般的な傾向として、方言保護の優先順位は確かに低い。専門家には危機感など感じる人がいるかもしれないが、それほど気にならない一般人も多い。